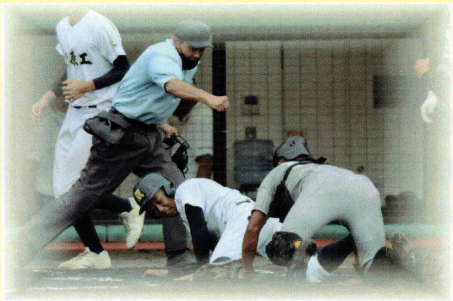
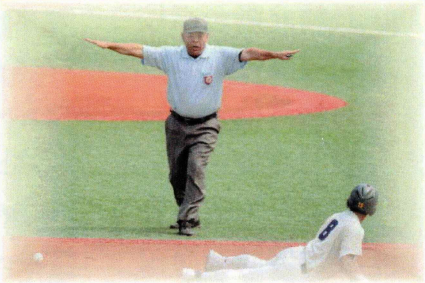
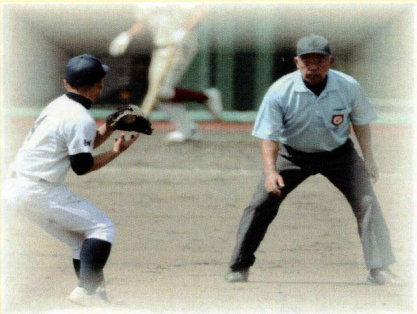
2022　夏の終わりに

『高校野球を支える人たちの思い』







長崎県高等学校野球連盟　顧問会

も　く　じ

			頁
・はじめに	長崎県高等学校野球連盟　顧問　千綿　勝彦		…… 1
＝＝＝＝＝＝＝＝＝　マネージャーたちの思い　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝			
・上五島高校	マネージャー	鵜瀬　胡桃	…… 2
・長崎工業高校	マネージャー	城代 ゆうり	…… 3
・長崎西高校	マネージャー	本嶋　理奈	…… 4
・長崎東高校	マネージャー	富澤　璃音	…… 5
・長崎北陽台高校	マネージャー	橋本　望央	…… 6
・長崎北陽台高校	マネージャー	山口　乃愛	…… 7
・壱岐高校	マネージャー	山口　真歩	…… 8
・壱岐高校	マネージャー	西本　優羽	…… 9
・壱岐高校	マネージャー	原田　京吾	……10
・佐世保工業高校	マネージャー	松田　麻央	……11
・佐世保商業高校	マネージャー	神應寺　杏奈・吉原　瑞樹	……12
・波佐見高校	マネージャー	赤木　愛来	……13
・平戸高校	マネージャー	松本　琳	……14
・九州文化学園高校	マネージャー	福島　ゆめ・山本　萌香・ 福富　瑞歩・本田　華野	……15
・諫早高校	マネージャー	鵜木　美歩	……16
・諫早高校	マネージャー	松尾　咲希	……17
・大村高校	マネージャー	中村　心	……18
・大村工業高校	マネージャー	酒井　花望	……19
・小浜高校	マネージャー	井上　まい	……20
・小浜高校	マネージャー	池本　しずく	……21
・小浜高校	マネージャー	濱田　虹花	……22
・川棚高校	マネージャー	前川　琴春	……23
・口加高校	マネージャー	本村　優奈	……24
・島原高校	マネージャー	森瀬　凛花	……25
・島原農業高校	マネージャー	森川　真綾	……26
・島原農業高校	マネージャー	上戸　柚希	……27
・創成館高校	マネージャー	福島　和花	……28
・鎮西学院高校	マネージャー	深川　ひかる	……29

＝＝＝＝＝＝＝＝＝　お世話になった人たちの思い　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　頁

・長崎県営野球場　球場管理　小坂　英二　……30
・長崎県営野球場　球場管理　鶴巻　亨　……31
・佐世保野球場　球場管理　那須　久宜　……32
・佐世保野球場　アナウンス　前田　由希子　……33
・長崎県審判協会　鮎川　博　……34
・長崎県審判協会　鳥羽　敏明　……35
・長崎県審判協会　法村　俊弥　……36
・長崎文化放送　報道スポーツ部　吉永　龍司　……37
・NHK長崎放送局　アナウンサー　嶋田　ココ　……37
・テレビ佐世保　田川　健一郎　……38
・ひまわりテレビ　荒木　大輔　……38

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　付　録　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　頁

＊＊＊＊＊＊＊＊　『監督たちの思い』　＊＊＊＊＊＊＊＊

・長崎西高校　監督　大久保　耕造　……39
・壱岐高校　部長　松本　未来　……40
・佐世保商業高校　部長　郷野　功典　……41
・佐世保西高校　監督　萩原　広太　……41
・鹿町工業高校　部長　青島　立弥　……42
・波佐見高校　部長　米田　一夫　……43
・平戸高校　部長　林田　景太　……45
・諫早高校　監督　田中　秀和　……46
・大村工業高校　監督　髙比良　俊作　……47
・島原農業高校　監督　皆良田　一輝　……49

・あとがき　長崎県高等学校野球連盟　顧問　北島　弘道　…… 50

当番校　散水
諫早農業高校
諫早球場にて

はじめに　　長崎県高等学校野球連盟　　顧問　千綿　勝彦

今年も厳しい暑さと、新型コロナウィルス感染が今だ終息のみえない中、甲子園出場を目指して、第104回全国高等学校野球選手権長崎大会が開催されました。

５５校、５１チームが参加した高校球児たちの青春のドラマが、若さに溢れ、元気溌剌、きびきびとしたプレー、汗と土にまみれたユニフォーム、最後まで諦めない精神力、勝者の歓喜や敗者の涙、友情など観る人に多くの感動を与えてくれました。

３年生は、最後の大会を迎えるにあたり、コロナ禍の中、入学以来３年間、大会や練習、練習試合等にも制約を受けながら、日々の厳しい練習に励んだことでしょう。

ここまで野球を続けてきた球児たちの努力と精神力に拍手を送るとともに、これまでさまざまな立場で励まし、支えてくれる人たちがいたことに感謝して欲しいと思います。

球児のプレーに公正にキビキビとジャッジを下す審判委員。エラーのない、好プレーをして欲しいとグラウンドの整備にあたられている球場の管理員の人たち。さわやかな声で試合を進めるアナウンスの女性。下宿、寮で選手の食事などに気を配り世話をする人たち。そして、一番身近で毎日の練習や試合時に献身的に世話をしている女子マネージャー。球児の家族の人など多くの人たちが支えています。

教育の一環として始まった高校野球は１００年以上が経ち、今や国民的行事とも言われるようになりました。その間、数多くの人たちが関わりを持ち、ここまで発展しました。そして今も、それぞれの立場で日々の練習や練習試合、大会運営などの世話をし、「支えている人たち」がいます。その人たちはどんな思いを持ち、高校野球に関わっていられるのでしょう。

今回の「夏の終わりに」第２回は、そんな「支える人たち」の思いを伝えるべく編纂しました。多くの人に読んでいただき、その思いを届けることができたら幸いです 。

長崎県高等学校野球連盟
挨拶　山口　千樹　会長

進行　長崎北高校　３年
平川　陽菜さん　宮西　慶さん

大会歌独唱
長崎北陽台高校　２年
道田　和佳さん

開会式の様子　７月８日　県営野球場にて

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　『マネージャーたちの思い』　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

上五島高校　マネージャー　　鵜瀬　胡桃

高校野球と関わったこの２年半。

それは私にとって一生忘れられない、最高の宝物です。「ルールもあまりわからない」、「スコアも書けない」、そんな中、私はこの上高野球部に入部しました。

父や祖母の影響で小学校のころからテレビで野球を見ることが多く、中学生の頃に甲子園を見ていて、「私もここに行ってみたい、一生懸命頑張る選手をサポートしたい」と思ったのがきっかけです。

同学年１人のマネージャー、選手も同学年は５人と少なく、１年生の頃は「やめたい」と毎日のように思っていました。それでも、みんなが練習を頑張っている姿や試合で活躍している姿を見て、私も頑張ろうと思いました。そして少しずつ部活が楽しみになり、気づけば、授業が終わったら、一番に走って部室まで行っていました。

先輩方が引退して、いよいよ私たちの代。正直やっていけるのかなと不安はありました。コロナの影響で試合がなくなったり、練習試合ができなかったりと思うように野球ができなくて、辛い時期もありました。そんな中でもいつも全力で頑張る選手の姿に元気をもらっていました。

そして迎えた最後の夏。初めての開会式。初めての入場行進。プラカードを持って入場したとき緊張しましたが、こんな貴重な体験ができてよかったと思いとても感動しました。

試合では最後まで、1・２年生も頑張ってくれ、今までにないくらい楽しそうに試合をしていて、負けてしまいましたが最高の試合でした。

この２年半、たくさん思い出ができて、頑張るみんなを一番近くでサポートできて幸せでした。この上高野球部でマネージャーができ、高校野球に関わることができて本当によかったです。

５人の同級生、後輩の選手、マネージャー、黒江先生、末永先生、これまで支えてくださった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。この大切な思い出を胸に、これからも頑張っていきたいです。

試合終了　ベンチ前　　諫早球場にて

長崎工業高校　マネージャー　　城代　ゆうり

大きな背中でチームを引っ張り続けてくれた先輩が, 引退することにまったく実感がわかないまま、私のマネージャーとして最後の１年が始まりました。とにかく、一日一日を少しでも選手のためになる日にしようと考えて、毎日グラウンドに上がっていました。

新チームになって初めのころ、先輩がいなくなったことに対して実感はなかったですが、不安もありませんでした。それは同級生１２人がいてくれたからです。それぞれが責任感が強く、支え合いながら進んでいくような１２人でした。そんな１２人が作っていくチームが強くなると感じたし、一緒に強くしたいと思いました。

本当に毎日、野球のことを考えて過ごしていたと、野球から離れてから感じました。高校に入学した頃は、自分がそんな風になるとは全く思っていませんでした。こんなに野球に夢中になったのも選手のおかげです。

選手たちの中には、結果が出ないことに落ち込んでいる人もいて『助けたい、力になりたい』と思いました。そして、その苦しみを乗り越えて成長していく姿に『自分ももっと頑張ろう』と力をもらいました。選手を支えるためのマネージャーでありながら、選手に支えられたことが沢山ありました。

心の底から長崎工業野球部のみんなに感謝しています。長工野球部のマネージャーをしている日々が楽しかったし、幸せでした。私が野球のことを考えて過ごしていた日々が、少しでもチームの力になれていたら嬉しいです。

選手と同じ熱量で闘った最後の夏は、私にとって忘れられない夏です。夏を終えたとき、思っていたよりも強く、素敵なチームが出来ていたと、試合に負けた後でしたが、そう思いました。

長崎県営野球場にて
写真は長崎工業高校提供

開会式　選手宣誓
長崎工業高校　主将
原口　央涼　君

長崎西高校　マネージャー　　本嶋　理奈

私には一つ下の後輩マネージャーが居らず、不安やプレッシャーを感じることが沢山ありました。また家族や友達と過ごす時間や勉強の時間を犠牲にする場面も多かったです。「何の為にここまでしてマネージャーをしているのか」と自分の中で思い悩むことも何度もありました。しかしその度に、頑張っている部員の姿をみて、自分がここで投げ出すわけにはいかないと感じ、最後まで踏ん張ることができました。

最後の試合が終わったとき、悔しさと同時に最後まで頑張れて良かったと清々しい気持ちが込み上げてきました。そしてその時、野球部に入ったことを後悔していないと胸を張って言えたことが、自分の中で本当に嬉しかったです。

この３年間を振り返ってみると、辛かったこと、悲しかったことも沢山あります。またそれとは比べ物にならない程、多くの楽しかったこと、嬉しかったことが思い出されます。

これらのすべての時間を一緒に過ごして、一緒に笑い、一緒にいろんなことを乗り越えてきた１６人の３年生、マネージャーが１人しかいなかった間、様々な場面でサポートしてくれた暖かい１０人の２年生、関わる時間は少なかったですが素敵な人ばかりの１年生、そしてなによりも、迷惑をかけてばかりだった私を最後まで見捨てないでいてくださった先生方には感謝の思いでいっぱいです。

こんなにも大好きな人達と出会えた西高野球部は私の宝物です。野球部で過ごした思い出は、これから先の人生のどんな時でも私を支え、そして原動力になってくれると思います。

シートノックのボール渡し

記録員としてベンチで
県営野球場にて
写真は長崎西高校提供

スタンドでのブラスバンドの応援　諫早球場にて

長崎東高校　マネージャー　　富澤　璃音

私は、野球のルールも仕事も何一つわからないまま、マネージャーとして長崎東高校の野球部に入部しました。

もともと私は、人見知りで、自分から選手に話しかけることができず、本当に自分が野球部の役に立てるか不安でした。ところが野球部には優しい人が多くて、すぐに野球部が大好きになりました。

そんな大好きな野球部を少しでも助けることができるよう、今自分がどう動くべきか常に考えるようになりました。引退した今では、高校入学当初より人と接することが楽しくなり、新しいことにも進んでチャレンジできるようになれました。また周りを見て、自分ができることを考える力を身につけることもできたと思います。

同じ学年の選手は、入部から引退までコロナウイルスの影響を常に受けていました。休校や分散登校などによって、練習時間が制限されたり、試合や合宿が中止になってしまったりしたこともありました。

そんな悔しい状況の中、野球ができることに感謝しながら、少ない時間の中で頑張っている選手の姿はとても誇らしく思います。

チームをよりよくするためにぶつかっていたこともありました。しかしそのおかげで最後まで長崎東らしいプレーができていたと思います。

たくさん大変なことがあった二年間だったのですが、最後の夏の大会でたくさんの同級生が応援に来てくれて、選手の頑張っている姿を見てくれて、「お疲れ」と声をかけてもらえとても嬉しかったです。

長崎東高校の野球部でマネージャーができた二年間は、私にとって宝物の二年になりました。たくさん迷惑をかけてしまった選手、マネージャー、山口監督、前田先生、コーチ、保護者の方々には感謝でいっぱいです。また、いつも楽しそうに全力で野球をしていた選手の姿を、最後の最後まで間近で見ることができてとても幸せでした。今まで本当にありがとうございました。

開会式　入場行進　　県営球場にて

練習試合での一コマ

写真は長崎東高校提供

長崎北陽台高校　マネージャー　橋本　望央

私が高校野球に携わろうと思ったきっかけは、小学校時代のソフトボールの経験と当時三年生だった主将さんの部活動紹介です。きっかけと言っても、当時はそこまで強い気持ちは持っていませんでした。だからこそマネージャーという仕事の大変さや重大さを深く感じることができた二年半でした。

私は、高校野球は本当に沢山の方々が携わってくださることで成り立っていると思います。実際に、試合毎に代わる審判員や記録員の方、本部の方、球場の係員の方、補助員の方々など、他にも多くの人が見えないところで動いてくださっているのを間近で見ていました。また、マネージャーの一人として、そのような場でアナウンスなどの貴重な経験をさせていただいたことをとても嬉しく思います。

二年半の部活動を通して、私が思っていたよりも、色々な場面でやりがいを感じました。部員からの「ありがとう」にはいつも笑顔にさせられました。また、小さな仕事でも大きな仕事でも、誰かのためになるということが達成感に繋がりました。いま何をすべきか、ということをなかなか見つけられずに、悩んだり指導していただいたりすることもありました。そこで、視野を広げて物事を考えて自分から進んで動くことの難しさと大切さを改めて学び、この二年半の中で沢山成長することができたと思います。

そして選手の皆には多くの感動をもらいました！こんなに三学年とも仲がよくてやさしくて素敵な部員とマネージャーに恵まれて、とても楽しく幸せでした。新チームも全力で応援します！！

ベンチより戦況を見つめる　　諫早球場にて

長崎北陽台高校　マネージャー　　山口　乃愛

私の高校生活の中で、野球部という存在はとても濃いものになりました。楽しいことも辛いことも、悔しいことも、野球部でたくさん感じることができたと思います。

私が野球部に入るきっかけは、野球部の見学に行って、野球を間近で見ることができることに感動したからです。日々のお茶づくり、選手や先生のサポート、道具の整理、スコアなどの仕事に加えて、試合でのアナウンスの仕事はとても大変でした。アナウンスは会場内に流れるので、もちろん失敗することは許されるものではなく、毎試合緊張しながら取り組んでいました。しかし、選手が聞いてくれていることもあり、「アナウンスすごく上手だったよ！」などと声をかけてくれることが多く、選手に助けられたことがたくさんありました。やめたいと思ったこともありましたが、夏の最後の試合の後、選手から手紙をもらい、最後まで一緒に頑張ることができて本当によかったと思いました。

マネージャーは選手のサポートをきちんとやることだけでなく、一緒に頑張ろう！勝とう！という選手との一体感を大事にしていくことが大切なのだと思いました。私は、野球部に入って、仲間の偉大さを知り、本当に高校生活の中で最高の思い出となりました。

きわどいコース
諫早球場にて

グラウンド整備　長崎明誠高校の補助員　県営野球場

壱岐高校　マネージャー　　山口　真歩　　「壱岐高校野球部のみんなへ」

最後の夏の選手権大会。「最後だからこそベンチに入りたい」という気持ちは私にはありませんでした。

それは３年男子マネージャーの存在があったからです。もともと経験者であったそのマネージャーは野球部にとっては大きな救いとなり、内野・外野に分かれてのノックや部員のカバーなど、チームとしてできることが増えました。その際、心のどこかで、京吾君（男子マネージャー）がベンチに入った方が様々な指示を出せてチームの為になると思いながら、最後の大会に挑みました。

しかし、準々決勝戦前の壱岐での練習終わりの際に３年生の部員が私に「今まで色々してもらったし、最後の代でもあるけんベンチに入らん？」と声を掛けてくれました。その一言が素直に嬉しくて、準々決勝戦のスコアラーとしてベンチに入らせてもらいました。

久しぶりのベンチから見るみんなは輝いていて、厳しい状況でも “まだ巻き返せる”と最後まで本気で点を取りに行く姿はものすごくかっこよかったです。精一杯スイングして、一生懸命走って声を掛け合っているみんなを１番近くで応援できたのはマネージャーの特権でした。

マネージャーをしていて、誰かの為に動くことの大変さや嬉しさ、些細なことや言葉が原動力になること、沢山の人に支えられていることを改めて感じました。そしていつも優しくしていただいたＯＢの先輩方、毎回３年生を助けてくれる先生方、後輩にも恵まれ、保護者の方々にも遠征や大会の度にたくさん助けていただいたり、声を掛けていただいたり、感謝でいっぱいです。毎回船やバスでの移動が大変でしたが、球場に足を運んでもらい、どのチームにも負けない応援を最後までありがとうございました。

この２年半は正直、役に立っていないと思うこともたくさんあり、辛くなることもありました。しかし、そんな時でも「ありがとう」の一言に救われ、最後までやり遂げることができました。

みんなのマネージャーができたことは、私の人生の中での一生の財産です。これからも壱岐高校野球部を応援し続けます。最高に楽しい時間をありがとう！

ベンチ　記録員
県営野球場にて

後片付け　佐世保野球場にて

写真は壱岐高校提供

壱岐高校　マネージャー　　西本　優羽　　「３年間を通して」

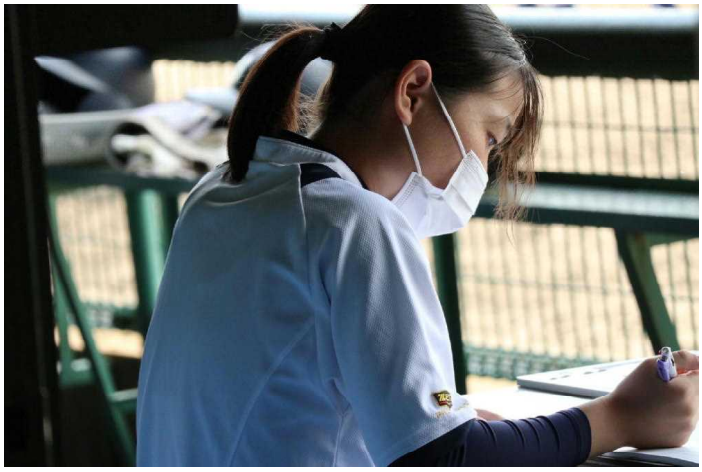
私に高校野球のマネージャーとして携わるきっかけをくれたのは、野球部に所属していた先輩の存在です。野球が大好きで、野球を第一に考えて過ごしている先輩から聞く話は、私に野球への高い関心をくれました。そのため私もより近くで野球を見たいと思うようになり、野球部への入部を決断しました。

最初は、野球に興味を持ったからという理由で野球部に入部しましたが、選手と近くで関わり、選手の頑張りを近くで見ていくうちに、「最高のコンディションで試合に挑んでほしい」と思うようになりました。そこで、私も選手のためにできることは何か考えるようになりました。選手が練習に集中できるように常に気を配り、飲み物がなくなる前に補充したり、雨の日にはグラウンドの水分をスポンジで取ったりしました。選手には自分の技術力を高めるために、チームの力を高めるためにのみ集中をしてほしいという思いのもと、私たちマネージャーにできることはマネージャーでやりたいと考えて動いていました。

野球部の活動を３年間続けて最も学んだことは、常に周りを見て動かないといけないということです。

野球というスポーツは他の競技と比べて危険なことが多いです。けがをすることも多々あり、けがの処置もしないといけないので、常に周りを見ていないとすぐ行動できません。選手が必要な時に必要な補助を行うことも大切で、これも周りを見ることのできる人でないとできないことです。

この３年間で学んだ、周りを見て動く力は、今後の私の人生の中で活かしていきたいと思います。大変なことも多く、投げ出したくなることもありましたが、壱岐高校野球部が試合に勝って喜んでいる姿を見ると私もうれしく、やりがいを感じることが多かったです。高校野球ありがとうございました。



スコアラー

折り鶴

佐世保球場にて

写真は壱岐高校提供

壱岐高校　マネージャー　　原田　京吾　　「高校野球を通して」

私が野球部に入部したのは、高校２年生の１２月。小・中学校で野球の経験がある私に、２年間勧誘し続けていただいた顧問の坂本先生から「選手じゃなくてもマネージャーをやってみなさい？」とお話をいただいたことがきっかけで野球部に入部しました。

そんな私が壱岐高校野球部で経験し、学んだことが２つあります。

１つ目は、自分が練習に参加し、選手とコミュニケーションをとることです。野球部には私が野球経験者ということもあり、知り合いや仲が良い人が多くいました。それがコミュニケーションを取りやすい要因の１つだったのかと思います。練習では内野ノック・外野ノック、時には全体ノックも打ち、試合前のシートノックでは外野ノックを担当しました。他にはブルペンで、ピッチャーの球を受けたりバッティングや守備・走塁に関してのアドバイスを行っていました。特にノックに関しては様々な回転をかけて、より実戦に近い球を打つように心がけて選手とコミュニケーションをとりました。

２つ目は、勝つ喜び・負ける悔しさを知ったことです。春季大会では諫早農業高校に負けて悔しい思いをしました。そして夏の甲子園予選では２回戦でシード校である諫早農業高校に７－０のコールドで勝利しました。その時、私はスコアラーとしてベンチ入りしており試合中は相手の情報を自らベンチに伝え、坂本先生と意見交換し試合を進めていきました。７回表最後のバッターを三振に打ち取り勝った時の喜びは、今でも鮮明に記憶に残っています。そして準々決勝で敗れはしたものの、３年連続ベスト８という結果で高校野球を終えたことは、私にとっても非常に誇らしいこととなりました。

私は野球部のマネージャー（学生コーチ）として短い間ではありましたが、多くの経験をさせてもらいました。高校野球は人と人を繋ぐものだと私は考えます。対戦相手の中には小・中学校で対戦した経験がある人も多く出場していました。一度野球を諦めた私が壱岐高校野球部に入部でき、自分にしか経験できないことを経験できたこともご縁があったからこそだと思います。そして高校野球にこのような形で携わらせてくださった方々に感謝しながらこれからの人生を送っていきたいです。

試合後の整列

スタンドからの応援

諫早球場にて

佐世保工業高校　マネージャー　　松田　麻央

私は、中学生のときによく野球の試合を見に行っていました。そこで野球をしている選手達がとても輝いて見え、憧れを抱きました。それから私は高校生になり、スタンドで味わったあの感動が忘れられず、野球部のマネージャーになりました。マネージャーの先輩がいなかったため、手探りで、飲み物を作ったり、バッティングやノックのお手伝いをしたりとやるべきことを見つけ取り組んできました。

少ない部員数のため練習内容が限られる事もありました。そのような状況でも、１つでも多く勝ちを取れるように選手達のサポートを日々頑張っています。

私が野球部に入って苦労した事は、人とのコミニュケーションをうまく取る事です。人と話すのが苦手な私は、部員の輪に入ることができず、大変でした。ですが、一緒にいる時間が増えていくにつれ、徐々に打ち解けていくとができました。

今では私にとっての佐工野球部は私を助けくれてる存在です。嫌な事があったり、落ち込んだりしても、グラウンドに来ればたくさん笑って元気になれます。私は佐工野球部が大好きです。

少人数であるからか、試合をする前から勝利を諦めしてまう事が度々あるため、たくさん勝って自信を持って欲しいと思っています。そのために私は、全力でみんなをサポートし、心から応援していきます。

開会式の様子

長崎県営野球場にて

佐世保商業高校　マネージャー　　神應寺　杏奈

マネージャーとして野球部に携わってきて、嬉しかったことや辛かったことなどたくさんの経験をすることができた３年間でした。人数は少なかったですが、他の高校と合同チームを組んだり、先生方や保護者の方などたくさんの人に支えてもらったり本当に恵まれていたなと思います。

暑い日も寒い日も夏の大会に向けて頑張っているみんなの姿を見てきて、試合でヒットが出たときはとても嬉しかったです。この３年間本当にいい経験をすることができました。今は感謝の気持ちでいっぱいです。

これから新チームになり、人数がより少なくなり、大変な場面もあると思うけれど、それをみんなで乗り越えられる、そんなチームになってほしいです。応援しています。

佐世保商業高校　マネージャー　　吉原　瑞樹

３年間を振り返って、私はたくさんのことを学ぶことができたと思います。特に、横の繋がりは大切なんだということを感じました。チームの雰囲気が良くないときこそ、マネージャーが横のつながりを大切にして、部員を精一杯サポートすることが大事なのだと感じました。マネージャーはサポートをする側ですが、仕事を全うすることでチームの成長を助けることができるのだということを学びました。

また、私は支える立場だったのですが、色んな人に支えられてもらっているからこそ、自分も支える側にまわることができたんだなとも感じました。このチームで３年間やり切れたことが私にとって誇りです！

試合準備　　佐世保野球場にて

波佐見高校　マネージャー　　赤木　愛来

私がこの三年間マネージャーをしてきて良かったと感じる時は、部員に「ありがとう」という言葉をかけられ感謝をされる時でした。

私たち野球部の伝統の言葉で「感謝無敵」という言葉があります。夢に向かって日々、練習を重ね続ける部員を支えたのは、マネジャーだけでなく、毎日熱いご指導をしてくださった指導者の方々、そして試合を応援してくださった保護者の方々、地域の方々の支えがあったからです。ご指導や応援、そして野球ができることがあたり前と思うのではなく、コロナ世代の私たちだからこそ感謝の気持ちを強く感じました。コロナ感染拡大防止のため練習や試合ができない時もありましたが、公式戦の試合が行われたことは何よりも嬉しかったです。

自分たちの代になっての初めての公式戦、秋季大会では、初戦敗退という形になってしまいましたが、今ではこの経験がスタートラインであり、二度とこのような負け方はしたくないと部員の気持ちに火をつけたと思います。

昨年よりも何倍も厳しい練習に取り組み、技術面だけでなく、人間性も日々成長していく部員を見て、私たちマネージャーは、勇気そして夢に向かって一生懸命努力するすばらしさを学ばせていただきました。

第１５０回九州地区高等学校野球大会は、宮崎県で開催されましたが、１回戦日章学園（宮崎代表）と対戦し、九州大会初の継続試合となりましたが、勝利しました。

２回戦は、九州国際大付属（福岡代表）と対戦し、０対１で惜敗しベスト８となりました。４月下旬の九州大会期間中は、宿舎生活でのマネージャーの仕事など今までに経験できなかった多くのことを学ばせていただくことができました。

第１０４回全国高等学校野球選手権長崎大会では、ベスト４というとても悔しい結果に終わってしまい、『監督を甲子園へそして「日本一の男に」』という夢を叶えることはできませんでした。しかし最後の最後まで諦めず、必死にプレーしている部員を見て、今までの試合で一番みんなが輝いていたように見えました。

試合が終わった後、部員から「マネージャしてくれてありがとう」と感謝の言葉をいただき、この学年、そして波佐見高校のマネージャーができて本当に良かったし、誇りに思います。３年生には、この三年間で経験したことを活かしてこれからそれぞれの道で頑張ってほしいと思います。

私たちが叶えることができなかった夢は、新チームが叶えてくれると思うので、応援していきたいと思います。

波佐見高校のマネジャーをさせていただいたこと、最高の仲間に出会えたことに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

選手権大会　開会式
長崎県営野球場にて

平戸高校　マネージャー　　松本　琳

私は、野球のルールも全く分からず、野球に興味がありませんでした。しかし、毎日きつくても努力して練習を頑張っている選手のサポートをしたいという思いと、サポートをするのが好きで将来にも役立つと考えたのが、マネージャーを志したきっかけです。

最初は、ただ選手をサポートしたいという思いだけだったのが、マネージャーを続けていくうちに野球やマネージャーの楽しさを知ることができました。

野球は、９人でするスポーツです。しかしベンチやスタンドで応援する仲間、指導してくださる先生、運営してくださる方、育ててくださった保護者の方、みんながいてくれたからこそできていると思います。

最初は、野球のルールもマネージャーの仕事も分からず、自分から行動に移すことができませんでした。しかし、先生や選手に教えてもらい、徐々に行動に移すことができるようになりました。そのことにとても感謝しています。また、他校のマネージャーに、試合でのアナウンスの仕方などを丁寧に教えてもらいました。何もできず覚えることに時間がかかっていましたが、選手や先生、他校のマネージャーやいろいろな人のご指導のおかげで、仕事をやりきることができました。難しかったけれど楽しかったです。

遠征では、選手のためにご飯を作りましたが、完食してくれた時には喜びを感じました。また、練習では選手が笑顔で野球を楽しんでいる時や、「ありがとう」などと感謝の気持ちを伝えてくれた時にやりがいを感じます。そして選手の負担を少しでも減らすために、道具の準備や整備、荷物運びをしようと思うようになりました。また、周りを見て行動するには、視野を広げ、すぐに行動に移すことが大事だと学びました。マネージャーをすることで、サポートする力や行動力が身につきました。今後、この経験を活かしていきたいと思います。

選手権大会　開会式　　長崎県営野球場にて

九州文化学園高校　マネージャー

福島　ゆめ　　山本　萌香　　福富　瑞歩　　本田　華野

私の学年は、マネージャー４人でスタートしました。誰一人野球経験者がおらず、入部した当初は野球のルールも知りませんでした。

マネージャーの仕事は、スコアの記入やアナウンスだけでなく、練習試合をする相手校への接待がありました。夏の合宿では、先生方からの「マネージャー講習会」があり、ご指導を受け、３年間でコミュニケーション力や奉仕の心など人としての基本的な部分を学ぶことができました。

「弱小世代」この言葉を原動力に走り抜いた３年間。
野球部マネージャーとして過ごした高校生活は、想像を超えるきつさでしたが、それをはるかに上回る感動を選手に与えてもらいました。

コロナ禍による練習試合や練習日数がうまくとれず、手詰まりを感じたときがありました。しかし選手が諦めず頑張っている姿をみて、パワーをもらい私たちも頑張ることができました。

先輩方が引退され、新チームになり、最初の頃は意見のくい違いが多くありました。思うようにまとまらず、悩むこともありましたが、私たちの世代は、チーム力があったため、どんな時も仲間を見捨てず、一致団結して頑張ってきました。このように頑張れたのも、先生、保護者の方々の存在があったことはもちろん、このマネージャー４人だったからこそだと思います。たくさん叱られ、たくさん泣いて、何度もくじけそうになったこともありましたが、その度に４人で励まし合いながら頑張りました。

高校野球を通してたくさんの人との出会いに感謝し、これからの人生において、この高校野球で過ごした貴重な経験を大切に、それぞれの道へ進んでいきます。

最高の仲間に出会えてしあわせです。

最後に、高校野球連盟のみなさんありがとうございました。

応　援
佐世保野球場にて

諫早高校　マネージャー　　鵜木　美歩

私は中学生まで文化部で、運動をすることとは縁のない生活を送っていました。しかし、野球を見ることが大好きで、また、幼馴染からの誘いがあったことをきっかけに“高校野球”という夢のある世界に飛び込みました。ただただ見ることが大好きなだけで詳しいルールは知らない、さらには先輩マネージャーがいないという不安の中で、私の野球部での毎日が始まりました。

初めはやるべきこともわからず、選手のサポートをするどころか、先輩方にお世話になるばかり。迷惑をかけたことも沢山ありました。そんな中でも優しく声をかけてくれたり、話の話題を振って私の緊張を解いてくれた先輩方や保護者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

私が野球部に入った当初は、勝負に対する強い思いはなく、楽しければいいと思っていました。しかし、野球の奥深さを知り、選手がプレーする姿を見るほどに野球で勝負することの面白さを感じ、チームが強くなるために自分に何ができるのか考えるようになりました。　何が正しくて何が選手のためになるのかわからないまま、自分で模索し、選手を観察したり練習方法や効果を調べてみたり、思いつくことをやりました。勝利に貢献できていたかは分かりませんが、少しでも選手の力になっていれば嬉しいです。

野球部での毎日はもちろん楽しいことばかりではなく、精神的にきついこともあり、退部を考えたこともありました。

しかし最後の夏、選手のみんなが最高の景色を見せてくれて、その時にここまで頑張ってよかったと心から思いました。

多くの方との素敵な出逢いのきっかけとなり、また同じ目標に向かって共に熱くなれる、そんな存在の尊さに気づかせてくれた高校野球に感謝しています。

引退した今“高校野球”でこれまでにないくらい熱くなれて幸せだったんだと気づかされています。野球部で過ごした２年半はこれからの私の財産です。最後になりますが諫高野球部のこれからの活躍を楽しみにしています。

マネージャーも応援
諫早球場にて

諫早高校　マネージャー　　松尾　咲希

野球部マネージャーとして過ごしたこの２年と少しの期間を通して、野球部の一員だからこその感動を味わうことができました。

コロナウイルスの影響で、練習試合がない中、スコアやアナウンスを覚え、部員と仲を深める機会もないまま日々が過ぎ去っていきました。それにも関わらず、洗濯物を手伝ってくれたり、声をかけてくれたりした部員のみんなには感謝しかありません。みんながいなかったらマネージャーでいることもできていないし、私の日々の原動力はみんなが毎日練習に励む姿でした。このチームに入って素敵な仲間と出会うことができて、本当によかったです。

また、部活を引退した今振り返ってみると、夏の大会を３回経験した中で、わたしたちマネージャーのレベルも上がっていきました。

マネージャーの先輩がいない中ベンチ入りし、スコアをつけるのに必死だった１年目。夏の大会当日に思ってもみなかった失敗をしてしまい、選手をいつも通りの状態にしてあげられなくて後悔が残った２年目。そして、３年間の中でいちばん長い夏になったにも関わらず、毎試合完璧な状態で試合に臨み、マネージャー９人全員が全てを懸けて応援できた３年目。

夏の大会で負けた時、悔しかったけれど、やり切ったという気持ちのほうが大きかったです。最後の試合の後に同級生に言われた「マネージャーを２回ずつベンチに入れたかった」という言葉を聞いたとき、このチームの一員として夏を終えることができてよかったと思いました。

この２年と少しの間、大変なことも多かったけれど、たくさんの方の支えで乗り切ることができました。支えてくれた先輩方、仲間、後輩、保護者さん、先生、コーチ、すべての人に感謝しています。

頑張れ　諫高！
スタンドからの応援
諫早球場にて

大村高校　マネージャー　　中村　心

私は高校入学当初、野球部のマネージャーになろうとは思っていませんでした。しかし友達からの誘いで入部することになりました。野球のルールは全く分からない状態で入部したため、入部当初は不安でいっぱいで、私がマネージャーを務めることができるのか、先輩マネージャーのように仕事をこなすことができるのか、と考えてばかりでした。

しかし、マネージャーとして選手のサポートをするなかで、選手の一生懸命な姿を毎日見ることができ、そのたびに私ももっと役に立つ、気の利くようなマネージャーになりたいと思うようになりました。

マネージャーをしていてきついと感じたり、辛いと思ったりするときもありました。それでも選手の諦めない姿や毎日必死に頑張る姿を一番近くでサポートすることができ、本当に楽しかったし、やりがいを感じることができました。選手たちの元気に楽しく野球をしている姿をマネージャーとして近くで見ていた日々は、私の一番の青春だったと思います。

私の中で、スコアの書き方を覚えることは一番苦労しましたが、選手たちの楽しそうなプレーのおかげで私もスコアを書くことが楽しくなりました。

最後の夏の大会も諦めない選手たちの姿に感動し、本当にマネージャーを続けてきてよかったと思える瞬間でした。

この三年間、野球部のマネージャーとして多くのことを学ばせてもらい、たくさんの貴重な経験をすることができました。また、野球部のマネージャーをして得られた多くのことをこれからに生かしていきたいと思います。

選手負傷　担架にて搬送
県高野連理事長・理学療法士の先生方も協力
諫早球場にて

大村高校グラウンドにて
写真は大村高校提供

大村工業高校　マネージャー　　酒井　花望　　「夢の高校野球」

私たちの高校生活は、休校から始まりました。大きく環境が変わり、ただでさえ不安がいっぱいの中での休校は、私たちをもっと不安にさせました。もちろん部活もありません。

五月の終わり、やっと学校に行けるようになり、私たちの高校野球は少し遅れて幕を開けました。

私は、大村工業で野球をしていた兄の試合を見に行ったとき、バリバリ働き、部員と仲良く話すマネージャーさんを見て、野球部のマネージャーになりたいと思いました。入部してすぐは、せっせと働く先輩マネージャーさんの姿を見るばかりで、何も動けない自分が悔しかったです。だから、早く部員のためになれるように先輩の動きを覚えたり、次の行動を予測したり、周りをよく見ることを大事にしていました。

三年生が引退すると一つ上の先輩が一人だったので、試合のアナウンスを一年生がすることになると言われ、まず私はアナウンスの練習を頑張りました。最初のほうは緊張で、マイクを持つ手も話す声も震えていたことを覚えています。早くできるようになって、安心して任せてもらえるようになろうと家でも練習しました。その成果あってか、秋には九州大会のアナウンスをやらせていただきました。また、練習試合のときに保護者さんに「聞きやすかったよ」「上手だね」と言っていただいて頑張ってよかったと思いました。アナウンスができても部員のためには直接関係のないことですが、少しでも試合の流れがスムーズになったり高校野球らしい雰囲気を出せていたら嬉しいです。

新チームが始まり、ますます夏の甲子園に向けて気合が入りました。私の長所は明るいところだと思っています。そしてチームにも明るさを与えられるように笑顔を忘れないことを心がけました。ダッシュなどきついメニューのときは近くに行って、みんなのモチベーションが上がるようにと声をかけました。

公式戦の前には同級生のマネージャーと二人で学校周辺のゴミ拾いをしました。試合前になるとマネージャーにできることはそれくらいしかないので、勝てるように、流れが来るようにと願いながらゴミを拾いました。

そして、最後の夏が始まりました。暑くて苦しい夏の練習を乗り越えて挑んだ最後の夏の大会は、初戦敗退、短すぎる夏でした。悔しくて信じたくなくて、泣き崩れるみんなの姿を見ていると、もっとできることがあったのではと後悔しました。

野球部で過ごした時間が楽しくて充実していたので、もっと長くマネージャーをやっていたかったです。そう思わせてくれたのは紛れもなく部員ともう一人のマネージャーのおかげです。本当に感謝しています。

大好きな仲間と二年半いっしょに過ごせたことは一生の誇りです。これからはそれぞれの道で、それぞれの形で活躍できるよう応援しています。

小浜高校　マネージャー　　井上　まい

私が、高校生になって野球に携わろうと思ったきっかけは、同級生の部員や仲の良かった先輩に誘われたからです。私は、ポジションや野球のルールすら知りませんでした。しかし、先輩に野球のルールを知らなくてもマネージャーをしていくと覚えてくるから大丈夫ということを教えてもらいマネージャーをやってみたいという気持ちが出てきました。

また、私が３年間マネージャーをして、成長することができた部分がたくさんあります。例えば、自分にできることを探して、行動する力が養われました。マネージャーの仕事は、草むしりや掃除、飲み物の用意などたくさんあります。先生にこれをしてほしいといわれることもありますが、自分で仕事を探してそれをするということばかりでした。

そして、うれしいことだけではなく、大変なこと、苦労することもたくさんあったので忍耐力も身に付いたと思います。マネージャーは選手たちの近くで支えてきた分、試合で勝った時などの喜びは大きいですが、普段の練習や練習試合の時は大変なこと、苦労することもありました。私たちは１年生の時に入部して２年生の先輩がいなかったため直ぐに１年生３人になりました。分からないことも多く、注意されることや、手際が悪く時間がかかってしまうことが沢山ありました。

しかし、そのようなことを乗り越えることが出来たのは保護者の方などいろんな方々にたくさんの言葉をかけていただくことが出来たからです。高校野球に携わることでたくさんの方の優しさを知ることが出来て本当に良かったです。

グラウンド　整列　　小浜高校グラウンドにて

写真は小浜高校提供

小浜高校　マネージャー　　池本　しずく

私は、野球部に入部して部活動の厳しさと大切さを改めて感じました。
私が、野球部に入部するきっかけになったのは部員でした。野球のことを何も知らない私に、野球は面白いからと声をかけてくれました。入部してからは、先輩方が優しく仕事を教えてくださいました。

一番苦労したのはスコアの記入です。野球のことを知らなかった私は、ルールや位置を覚えるところからでした。先輩方が引退する数か月後には全てを覚えて、一人で書けるようにならないといけなかったので、家に帰ってからも勉強しました。

あっという間に先輩方が引退し、自分たちで全てやらなければいけなくなりました。先輩方みたいにうまく支えられるかわからず不安でいっぱいでした。失敗も何度もしました。それでもマネージャー３人で協力し一生懸命頑張りました。マネージャーになり、周りを見ることの大切さや礼儀の大切さを改めて感じました。

また、部員は私たちが悩んでいるときや困っているときは必ず助けてくれました。私たちは、部員や保護者の皆さんに支えられてマネージャーをできたのだと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、高校野球を全く知りませんでしたが、野球部に入って応援していると野球がとても好きになりました。試合でのドキドキする気持ち、勝ってほしいと強く願っていた気持ちは今でも思い出します。ベンチではお互いを励まし合っていた雰囲気がとても好きでした。２年半野球部のマネージャーとして皆を支えることができ、一番近くで応援できて良かったと思っています。これから学んだことは将来に生かしていきたいです。

整　列

小浜高校グラウンドにて

写真は小浜高校提供

小浜高校　マネージャー　　濱田　虹花

二年半高校野球に携わってきて、私は本当に充実していたと思います。

私がマネージャーに入ったきっかけは、部員やマネージャーの先輩から声をかけられたことです。マネージャーの方が優しく接してくださり、部員との関わりを見て、とても雰囲気が良いなと思いました。私は人と関わるのが苦手で、克服したいと強く思っていました。

入部した当初は野球のルールも知らず、分からないことだらけで不安も大きかったです。毎日、朝早く学校に行き、補食を作ったり、掃除をしたり、苦労したことはたくさんありました。身体も慣れず、気落ちすることも少なくありませんでした。ですが、そんな時に仲間がいて、支え合うことが出来ました。同じ気持ちの仲間がいたから、何事にも一生懸命になれることが出来たと思います。

また、苦労したことと反面、うれしいこともたくさんありました。それは、マネージャー活動を通して、保護者の方から、たくさんのうれしい言葉をかけられたことです。「マネージャーがいてくれるから部員ががんばれるとよ」「ありがとう」、そういった励ましの言葉が、マネージャーとして活動していく糧となりました。

そして、部員を近くで応援できることです。部員たちは野球になると、真剣になりどんなにきつい練習も一生懸命取り組みます。そんな姿をグラウンドで間近で見られるのもマネージャーでいれたからだと思います。

また試合では、勝った時のうれしさや、負けた時の悲しみを分かち合いました。毎試合、スタンドで応援し、強いチームに勝つことが出来た時のうれしさは、今でも忘れられません。実際にベンチに入りスコアを書いたり、アナウンスをしたり、スタンドで応援できたことは貴重な思い出です。

私は、野球に携わり、仲間の大切さ、人との関わり方、礼儀作法、いろんなことを学ぶことが出来ました。二年半、マネージャーとして部員のサポートが出来てよかったです。

チームメイト　　小浜高校グラウンドにて

写真は小浜高校提供

川棚高校　マネージャー　　前川　琴春

私は、小学校・中学校と野球やソフトボールを経験しました。そのため高校入学後は、高校野球に携わりたいと思ったのが、入部のきっかけでマネージャーになりました。

入部した当初、先輩方がとてもやさしくしてくださり、毎日放課後の部活が楽しみだったことを思い出します。

新チームとして活動が始まった時、チームがまとまらず、いろいろな面で不安なこともありました。その中で、一番近くで部員を支えることができ、成長していく姿を見られたことはマネージャーをしていてとてもやりがいを感じました。

川高野球部は明るく元気な部員が多く、試合中も楽しんで野球をしていて、私もスコアをつけながら楽しく試合を見ることができました。

マネージャーの仕事を上手くこなせず、部員や先生に迷惑をかけてしまうこともありましたが、たくさんの人に支えてもらい最後まで楽しく自分の役割を果たすことができました。　約２年間のマネージャー生活を通して学んだことは、今後の生活の役に立つことばかりだと思います。３年生になりマネージャーのリーダーとして認めて頼りにしてくれた部員、後輩マネージャー、さまざまな場面で支えてくださった先生、保護者の方々、また野球に携わるすべての方々に感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

三塁ゴロ

佐世保野球場にて

口加高校　マネージャー　　本村　優奈

中学生の時の部活の先輩が、口加高校の野球部のマネージャーとして所属していることをきっかけに、私も口加高校野球部のマネージャーとして野球部に入りました。当初は、マネージャーの仕事がどのようなものかわからず、野球部の先輩や先生方に教えてもらいながら仕事をこなしていました。また、私がマネージャーとして活動しなければならないことは、どんなことなのかを考えながら過ごしたことが思い出されます。

私が二年生の時は、夏の選手権大会が終わり三年生が抜け秋になると、部員の人数が極端に少なくなり、単独チームとして活動できなくなり、連合チームとして活動していくようになりました。連合チームの合同練習や練習試合を通して、部員たちと会話をしたり、先生方や保護者の方と会話をしたりしていくうちに、三つの学校（口加高校・国見高校・島原翔南高校）が、一つのチームになっていったような気がします。

夏の選手権大会では、これまで野球部に入って、経験したことのなかった開会式の入場行進や試合など、緊張感や達成感を実感することがたくさんありました。そして振り返ってみると楽しい部活動生活を送ることができたと思います。今では野球部のマネージャーとして活動できてよかったと思っています。

口加高校・国見高校・島原翔南高校
連合チームの開会式　入場行進
長崎県営野球場にて

写真は口加高校　片山部長提供

コロナ対策　　国見高校・島原翔南高校選手による
試合終了後のベンチ消毒　　諫早球場にて

島原高校　マネージャー　森瀬　凛花

野球部マネージャーとして過ごした２年半、私の心の支えになっていたのは、部員がかけてくれる「何気ない言葉]でした。いつでも気にけかてくれ、小さなことでも見ていてくれ「ありがとう」と言ってくれる度に、みんなのマネージャーができて幸せだと感じ、ここまで頑張ことるでがきました。

どんな時でも励ましあい、笑顔で全力でプレーするみんなの姿にたくさんの元気をもらいました。そんなみんなのためになることをしたいという気持ちで過ごしたこの二年半は、私にとってすごく大きなのもになりました。

辛かったこと、上手くいかないこともたくさんありましたが、それ以上に楽しくて幸せでした。私にとってみんなと過ごした時間の全てが宝物です。

野球を通して様々な出会いがあり、たくさんのことを学ぶことができ、たくさんの方々に感謝しています。そして何よりも、いつもどんな時も支えくれて、たくさんの思い出をくれた、同学年の１０人に心から「ありがとう」と言いたいです。

高校野球発展に貢献　２氏に球育賞

高校野球の発展に尽くしたとして朝日新聞社とNCC長崎文化放送が贈る「朝日・NCC球育賞」。今年は県高野連理事の山崎薫さん(57)と県野球審判協会審判委員の島田欣也さん(63)が選ばれ、7日の開会式で表彰された。

チャレンジ　問い続け34年

県高野連理事　山崎薫さん

1989年の平戸高校を皮切りに、計5校で野球部の監督や責任教師を歴任した。34年間、子どもたちに問いかけてきたことがある。「『可能』の反対は」

部員の少ないチームを任されることが多かった。2010年から6年間勤めた西彼杵高校は9人そろえることに苦労するほど。

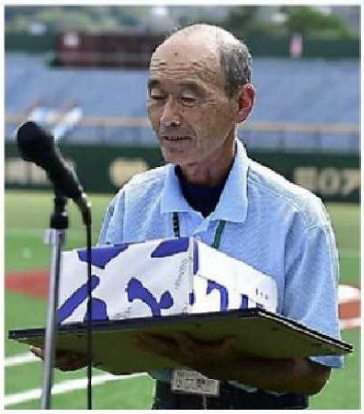
でも、「人数が少ないから」を言い訳に、最初から勝負を諦めて欲しくない。そんな思いで「少なくても声で相手を圧倒しよう」「少ないけど強豪校に勝とう」と声をかけ続けた。

印象に残っているのは、12年夏の長崎大会。わずか14人で、倍以上の部員がいる強豪校を倒し、3回戦まで勝ち上がった。

どんなに部員が少なくても、入部したばかりの1年生には決まって「甲子園をめざそう」と話す。「可能の反対は、チャレンジをしないこと。最初から諦めていたら何も始まらない」

(岡田真実)

運命を左右　見極めて判定



県審判協会審判委員　島田欣也さん

18歳で就職した島原市役所の職員チームに加わったのが野球との出会い。面白さを知り、練習にのめり込むうち、先輩から「審判もやらないか」と誘われた。

審判歴は約35年。最も思い出に残る試合は、佐世保実が長崎商を破った2012年夏の決勝だ。サード強襲の当たりが劇的な延長サヨナラ勝ちを呼び込んだ。歓喜と涙。明暗を分けた1球を三塁の塁審として目の当たりにした。

「良い意味での緊張感を味わえるのが審判の醍醐味」と語る。一方で、「一つのジャッジが球児の運命を左右することがある。おろそかにはできない」。あわてず、急がず、よく見極めてから判定するよう心がけている。

コロナ禍を乗り越え夏に挑む選手たち。「審判として敬意を表します。周囲への感謝を忘れず、全力プレーでスタンドを沸かせてください」

(三沢敦)

7月21日付け　朝日新聞　長崎版より

島原農業高校　マネージャー　　森川　真綾

入部して３年間楽しいこと、悔しいこと、たくさんのことを乗り越えてきて３年目の夏、２回戦まで進出出来たこと、これが一番の思い出です。

先輩マネージャーがいなかった私たちは、１から頑張って選手を支えてきました。うまくいかないことがたくさんあり、苦戦したこともありました。慣れていくにつれ、選手のためにできることはないかと先を読める行動ができるようになったのは、３年間マネージャーをしてきてついた力だと思います。

新型コロナウィルスの影響で、活躍する場面が減ったり、練習試合ができなかったりと悔しい思いをしてきました。それでも勝ちたいという思いで練習に励み、成果を試合で発揮する選手を見て私も勇気づけられました。

夏の大会では、９回裏同点延長まで持ち込み、１０回裏逆転と最初で最後の試合を味わうことができました。この試合ができたことは指導してくださる先生方、応援してくださる保護者の方々、コロナ禍でも感染症対策を徹底し運営してくださった関係者の方々のおかげだと思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

練習試合の補助

島原農業高校グラウンドにて

写真は島原農業高校提供

島原農業高校　マネージャー　　上戸　柚希

私が、野球部のマネージャーをしていて良かったと思う瞬間は、部員に『ありがとう』など感謝の気持ちを伝えられたときです。

私は、兄が野球をしていたので試合によく足を運んでいました。その影響もあって、私は野球が大好きで、高校では野球部のマネージャーをしたいと思い、入部する事を決めました。

入部当初はマネージャーの先輩がいなかったので、何をしたらいいのか分からず、すごく戸惑い、部員にはたくさん迷惑をかけました。

マネージャーの仕事をしている中で、自分が本当に役に立っているのか不安に思ったり、『もう嫌だ』と思ったことは何度もありました。しかしそれぞれの目標に向かって、一生懸命練習する選手の姿を見ている時や、部員に感謝の気持ちを伝えられた時に、マネージャーをしていてよかったなと思いました。

この３年間、大変こと、辛いこと、しんどいこと、数え切れないほどありましたが、それ以上に得るものが大きかったです。身近で選手の成長していく姿を見るのはとても楽しかったですし、誰かのために一生懸命になることの楽しさも学ぶことができました。

また私は、マネージャーになって、先を読んで行動したり、自分にできることを見つけて行動することができるようになりました。

この３年間で自分自身いろんな面で成長することができ、本当に良い学びと経験をさせていただきました。私に野球の楽しさと素晴らしさを教えてくれた選手のみんな、監督を始めとする指導者の方々、心から感謝しています。ありがとうございました。私はこれからも島原農業高校野球部を応援しています。

練習試合のスコアラー

島原農業高校グラウンドにて

写真は島原農業高校提供

創成館高校　マネージャー　　福島　和花

７年前の夏、私は高校野球に圧倒され、そこから野球の虜になった。７年前から憧れ続けた甲子園。そしてその憧れを現実に変えるために創成館を選んだ。

マネージャーは、唯一選手に近い目線でチームを客観的に見られる立場だと思っている。私は、新チームになってから、この代のチームのダメなことに気づくことが多かった。でも、それを選手に伝えることはできなかった。そんな私を変える出来事があった。

それは春の大会での敗戦。負けは悔しい。だけど、あの負けは何かが違った。涙が溢れた。その日から私は選手に厳しく接することに決めた。沢山のことに気づいていたのに、口にしてこなかった自分が憎かった。心のどこかで選手に甲子園に連れて行ってもらうという想いがあったのかと思うと情けなかった。

『甲子園に行くためならなんだってする。』『どこのマネージャーよりも嫌われる存在になる。』そう自分に誓った。思ったこと、気づいたことは選手にぶつけた。

それから楽しいと思うことはほとんど無くなっていった。とにかく精神的にきつくて、毎日が苦しかった。逃げ出したくなる時もあった。でも、そんな時、自分を止めたのは、大好きな野球、そしてあこがれの甲子園だった。

迎えた最後の夏。甲子園へのラストチャンス。この代は力があったとは言い難い。だからこそ、全員で勝ちにこだわり、勝利を掴み取っていった。結果は準優勝。悔しかった。甲子園に行きたかった。でも、甲子園以上のものを選手達は私に与えてくれたと思っている。どんな相手だろうと食らいつき、立ち向かう姿に感動し、素敵な面白い試合ばかりを見せてくれた。野球の面白さ、高校野球の素晴らしさを再確認させてくれた。ありがとう。

約２年４ヶ月、毎日が学びの場だった。支えてくださった指導者、保護者をはじめとする全ての方々に感謝を伝えたい。

始球式　　写真は創成館高校提供

ミーティング

ベンチ前整列　　県営野球場にて

鎮西学院高校　マネージャー　　深川　ひかる

高校野球人生にすべての時間を捧げたこの３年間に終わりを告げ、今、振り返ってみると様々な思い出が蘇ってきます。苦しみも感動も涙も今ではかけがえのない人生の１ページとなりました。

がむしゃらに白球を追っているプレイヤー、それに呼応するかのように白熱したスタンドの応援に夢と勇気をもらいながら、マネージャーをさせてもらいました。

暑い真夏の太陽を浴びる日も、冬の凍るような寒い日も日々努力を重ね、試合に向けて自分との闘いでもあり、見えない敵との闘いでもあったこの３年間でした。決して楽な事ばかりではありませんでしたが、それはこの時代に生まれたからこそ味わう事のできる貴重な経験になったと思いました。

最後の夏の大会は、沢山の方々のお陰で無事開幕され、どこのチームも記憶に残る試合になったと思います。

高校野球は高校球児だけでなく、私にとっても人生を大きく変えてくれた道しるべとなりました。もう二度と戻ってこない３年間のことを思うと、心にぽっかり穴があいたような寂しい気持ちにはなりますが、今度は後輩達にバトンを渡し、新たな歴史を刻んでいってほしいと思います。

また、同じチーム同士だけではなく長崎県内のすべてのチームが、お互いに高め合い全国のチームを圧倒するような、そんなチームをみんなで創り上げていってほしいと思います。

高校球児の皆さん！これからも応援しています！今、掲げている目標を実現できるように頑張って下さい。

記録員
諫早球場にて

Manager's

道具の手入れ
学校グラウンドにて

写真は鎮西学院高校提供

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　『お世話になった人たちの思い』＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

長崎県営野球場　　小坂　英二

県営球場の仕事に携わり、７年目になろうとしています。子供の頃から野球を始め、今日まで続けておりますが、グラウンドの整備がこんなにもたいへんだとは思いませんでした。グラウンド整備の仕事はいろいろとありますが、特に人工芝の中に入り込んだ土を熊手という道具で掻き出す作業は、手や腰に負担がかかるたいへんな作業です。

私も高校時代、原貢監督（元三池工業高校）の元で甲子園を目指し、練習に励みました。守備練習でノックのボールがイレギュラーし、先輩の顔を直撃。血に染まった先輩の顔やその光景を今でも鮮明に覚えています。このことによりグラウンド整備の大切さを痛感しました。

以前、子供たちに野球を指導する中でも前述のことを教訓にけがや事故がないように、グラウンド整備を特に心がけていました。そしてそれが現在のこの仕事に生かされていると思います。

県営球場も２５周年が過ぎ、人工芝もリニューアルされ、選手の動きも新鮮ではつらつとしたプレーが見れることをうれしく思います。

現在、野球人口も減り、指導方法も変わり、指導者の方もたいへんだと思っています。子供たちが野球で学んだことが社会に出て役立ち、頼られる社会人になることを私は願っています。

私たちスタッフ一同は、頑張っている選手を見守り、高校野球の一ファンとして応援しています。

５回終了　グランド整備

長崎文化放送HPより

グランド整備中

長崎県営野球場にて

長崎県営野球場　　鶴巻　亨

おかげさまで長崎県営野球場（ビッグNスタジアム）も令和４年７月２６日で開場２５年を迎えることができました。

今年は、１６年ぶりに内野の人工芝もリニューアルされました。これまでにも、ビッグＮの大きな改修や節目を迎えるときには、長崎の野球界にいい流れが入ってきているので、今回も大いに期待したいところです。

さて、私自身平成１８年４月より県営野球場で管理運営に携わっています。今年で１７年目を迎えます。この間、グランド作りも日々変化し、選手が同じ条件のもと平等にプレイできる環境づくりが進んでいます。『選手がストレスなくプレイできるように』と私たちもアンテナを高くし、最新の情報と技術の習得に努めています。

最近では、高校野球も含め、各方面より人工芝の整備方法やマウンドの作り方についての問い合わせをいただくことも多く、要望に応じて私たち野球場スタッフが他の野球場や高校のグランドに出向き、時にはグランドの整備方法やマウンドの仕組みなどを選手に伝えたりする活動も行っています。

高校野球は、さまざまな環境の変化に選手自身が対応していかなければなりません。ちょっとした感覚の違いが勝負を分けるときもあります。その一つにグランドも含まれ、選手が変化や違いに気づき、対応する一助になればという思いで話をしています。

最後に、長崎だけでなく、日本野球界を取り巻く現状として、子どもや親からも野球が選ばれなくなり、学童野球・中学軟式野球・高校野球の各世代の野球人口が大きく減少しています。

この現状を打破するため、高校野球連盟をはじめ各連盟が様々な取り組みを行っています。野球場としてもそうした取り組みを支援しながら、新たな視点で底辺の拡大-野球人口の拡大を図る取り組みを進め、再び、子どもたちから野球を選んでもらえるように、野球の楽しさ、素晴らしさを発信していきたいと思っています。

県営野球場にて

審判員

写真は長崎新聞社HPより

佐世保野球場　　那須　久宜

私は、平成１４年に採用され陸上競技場で勤務し、令和３年にこの総合グラウンド野球場へ来ました。私自身も小学校からソフトボール、中学校は軟式野球、高校では硬式野球をやってきて、自分もこの野球場で青春時代を過ごした一人です。総合グラウンド野球場は、昭和５４年竣工で私と同じ歳です。

当時の野球場は、スコアボードもパネル式で、補助員をしているときに、スコアボードの隙間から試合を覗いてよく怒られたりしていました。また外野の芝生が梅雨時期になると藻が生え、つるつる滑り外野のゴロもイレギュラーをしたりと外野手泣かせの球場でした。それでも当時の３つの野球場（大橋球場、諫早球場）の中では一番の野球場だったと思います。

時を経て、私も野球をする側から、支える側となり、現在、野球場へ来て２年目を迎えています。思っていた以上に野球場の管理の大変さが、やっていくうちに解ってきました。先ずは、内野の黒土の具合(湿り気や土の配合の割合・転圧作業等)や、「どうやったらイレギュラーが無くなる内野になるか」など、考えればきりがありません。そのため、試合前のシートノックを観察しています。また降雨の際には、「どこに水が溜まるか、水路はどこに出来ているか」なども見ています。それによって雨前のグラウンド整備も変わってきます。

異動してきて初年度に達成できた事は、外野のレフト・ライト線の人工芝を天然芝へ張り替える作業を行いました。工事を業者に頼むと100万円以上かかる仕事です。そのため私たち佐世保市スポーツ協会の職員６～７名で張替えを行いました。100万円以上かかる工事を30万円弱に抑えることが出来ました。

また、近年の高校生の身体が大きくなったこともあり、ショート、セカンドの守備位置が芝生に入って守る選手が見受けられた為、思い切って冬場に芝生の境い目を２m40㎝切り、黒土(内野)の範囲を広げました。また、正面玄関外壁の塗装も職員が高所足場を組み、春の大会までに間に合わせました。

ビッグNができ、諫早球場が新設され、昔とは逆の立場になった総合グラウンド野球場ですが、職員一同『見る・聞く・実行する』を合言葉に、利用者目線に立ち、プレイヤーの気持ちになり整備を行っています。建物は古いですが、グラウンド内や芝生の事ではどこにも負けたくないと思って、毎日頑張っておりますので、何かございましたらお気軽に声をかけてください。

最後になりますが、総合グラウンド野球場で昔の様に高校野球が１日でも多く試合ができる様、心がけてまいります。

第104回全国高校野球選手権長崎大会に出場した３年生の皆さん、感動をありがとうございました。

佐世保野球場アナウンス　　前田　由希子

司会業を生業としている私が、ご縁があって高校野球のアナウンスに携わって、早いもので８年になります。

およそ８年間、高校球児たちを裏で支える、高校野球連盟の先生たちの姿を見てきました。

役員になられた先生方は各高校で教鞭をとり、野球部の指導に加え、各大会運営の仕事をこなし、顧問の先生たちと共に、多くの大会運営の仕事をこなされます。毎年のことですが先生方の働きに頭が下がる思いです。

特に夏の大会においては、スムーズな運営を求められる中、様々なトラブルが発生することも・・・。それでも、経験豊富な顧問の先生たちの機転と判断に助けられ、乗り越えてきました。

おかげさまで、佐世保地区の役員や顧問の先生方たちに信頼していただき、私たちは、のびのびと楽しくアナウンスさせていただき感謝しております。

佐世保野球場での主な仕事は、アナウンス・落とし物や車の移動の放送・スコアボードに表示するデータ入力・ＳＢＯの表示と役員の先生方のサポートがあります。

「正しく・ゆっくり・はっきり」をモットーに、最も気を付けているのは、選手一人ひとりの名前を、変に抑揚をつけず、伸ばさず、正しく呼ぶこと。選手交代やシートの変更は試合の流れを崩さないように、正確かつ迅速に。そして選手がバッターボックスに入る前に「○番、守備位置○○君」のコールを終えることです。出来れば、名前をコールして一呼吸おいて選手がバッターボックスに入るのが私の理想です。名前をコールするときは、その選手が自分の力を出せるように、祈りながら呼んでいます。

アナウンスを担当する時、試合展開に一喜一憂しながら、毎年、選手のプレーや、マネージャーの頑張りに感動させてもらっています。

今後も佐世保地区のアナウンス技術向上に力を入れ、高校野球に真摯に携わっていく所存です。

私たち佐世保地区アナウンスは試合に出場する選手一人ひとりをしっかり自慢の美声で応援していきます。

審判協会　　鮎川　博

審判委員は 、『石ころだ』と言われた時代から５０年が過ぎようとしています。
審判委員も生身の人間です。正確なジャッジが当たり前ですが、時として誤審もあります。そのため、それを間違いなくジャッジできるように年２回の講習会を行ってりおます。

５０年余り前、突然、「審判要員がいないから明日から審判委員になってくれないか」と当時の中地区審判協会会長から強制的に勧誘されました。今なら「やりません」と言ったと思います 。

私が、高校野球審判要員として当時大橋球場(現ＢｉｇＮ)がデビュー戦でした。当時の『わくわく感 』は今の高校球児も同じ気持ちだと思います 。

高校野球生活は、入学から３年生の夏の選手権大会まで、短い期間の真剣勝負です。その勝負をジャッジする審判委員もまた、選手以上の気持ちをもって試合に臨んいまです。

夏の炎天下、若い審判委員もベテラン審判委員も、大会期間中は体調管理を選手以上に心がけて大会に臨んでいます。

球児が、聖地甲子園を目指すように審判委員も派遣審判委員として、聖地甲子園球場に立つ機会があります。

参加５０数校のうちの１校だけが甲子園のキップを受け取ることができるのです。私たち、審判委員もそのキップを受け取った１校が、長崎県出場全校のために聖地甲子園で勝ち進む事が願いです。

選抜高校野球は優勝もありますが、夏の選手権大会での全国優勝はまだありません(他に18県)。ぜひ長崎県に深紅の優勝旗を持ち帰ることを願って、全アンパイヤーも真剣勝負で臨みます。

2022年選手権を審判室から見ていて、終了の挨拶をグラウンドの選手・審判委員と一緒に一礼するとき、敗者の学校が３年間全力で練習し、この１試合を満足なプレイで終了した表情を審判委員として見るのが願いです。

今年の大会で、ケーブルテレビの中継の解説をしたところ、この２年入場制限で高校野球ファンから「今年は入場がかなってよかった」という声がかかりました。１日も早く新型コロナが終息することを願います。

最後になりますが、長崎野球県審判協会の審判委員が不足してりおます。５０年前のように強制的に誘っても今の若者には通じません。

高校野球及び野球に関心のある方で審判委員をやってみたい方は、ぜひ連絡をお願いいたします。

諫早球場当番
グラウンド整備
創成館高校

審判協会　　鳥羽　敏明

昭和５１年に審判協会に入会し，４６年が過ぎようとしています。その中で一番思い出に残っている試合が、初めて決勝戦の三塁審判をした時のことです。長崎西高校対長崎東高校の伝統ある二校の東西対決です。

５回を過ぎたころから、両校スタンドに学生カバンを持った白色の制服を着た生徒たちの集団が集まりだしたのです。両校とも夏補習後の応援活動でした。身震いをしたまま終了のサイレンを聞いたのを覚えています。正に文武両道の姿です。

次に思い出に残る試合は、北松西高校のベスト４をかけた佐世保球場での試合です。三塁の審判をしていて、あの光景は忘れられません。一塁側に陣取った応援団の熱気と割ればんかりの拍手は、私の目の前で素晴らしく輝いて見えました。青い揃いのＴシャツで、大漁旗が大きく揺れて、島民あげての応援でした。気持ちが片方に揺らぐ瞬間を少しだけ感じました。

これだけの感動を与えくれてる高校野球の魅力に、私たち審判員もすごく勇気をもらっています。育ててもらった高校野球に少しでも貢献出来たらと思ってやってきた審判員活動も５０年に手が届どくところにいます。多くの出会い、思い出があるこの高校野球に携わって来れた事に感謝しています。

現在は先輩として、また審判長として、審判員に言い続けている言葉に、「このグラウンドに最初に足を踏み入れた時の気持ちを忘れないで下さい」そして「高校生の気持ちになって審判して下さい」ということです。

「規則書を愛して下さい。」「ルールを好きになってください。」元日本高野連審判長の言葉です。何かの折に話をさせて頂いています。

最後に高野連の先生方にお願いです。野球部卒業生に審判員へ道を勧めて下さい。ご協力を宜しくお願い致します。

佐世保野球場での試合の様子

審判協会　　法村　俊弥

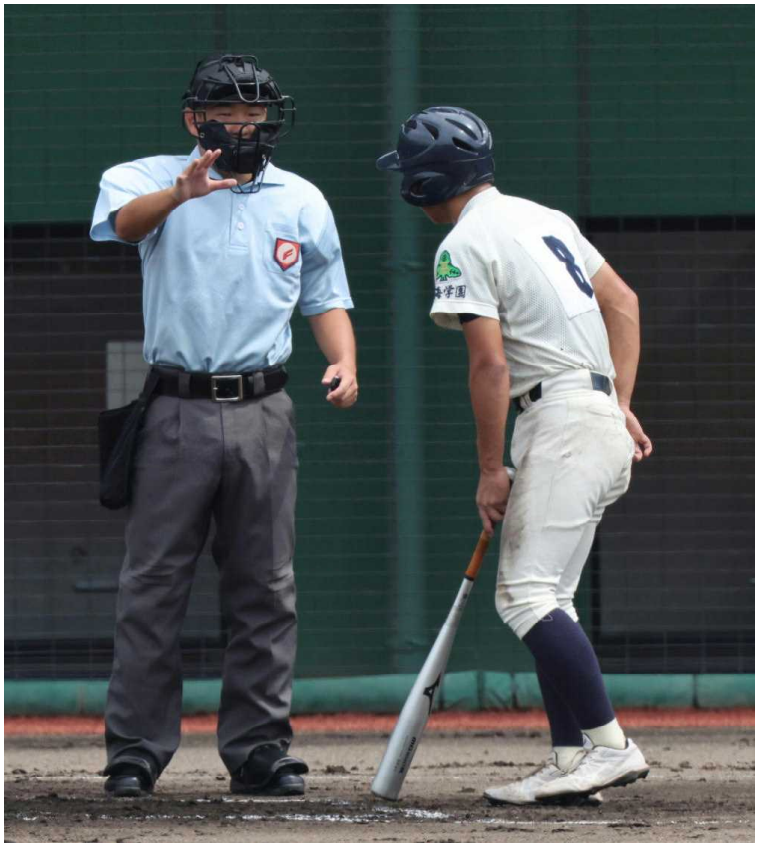
今年の夏の大会は、審判委員になってから１０年の節目として迎えました。そのため変に力を入れず、いつもどおり試合に臨むことを心掛けました。

毎年、夏の時期はピリピリする感じがして緊張したり、憂鬱な気分にもなりますが、反対に、自分の中にこの時期を待ち望んでいる気持ちもあり、複雑な感情を持ちながら試合を迎えています。

今年の夏の大会を３年生として迎えた選手たちは、コロナ禍で様々な制限がある中で３年間を過ごし、最後の大会に臨むことになったと思います。しかし、私の目に映ったのは、目の前のボールを懸命に追いかける、これまで目の前で見てきた光景となんら変わらないものでした。

「選手たちが何の障害もなく、思い切り野球をプレーできる環境を次の世代へ繋げていく」、高校野球に携わる者として、これからもそのために力を尽くしていきたいと改めて感じることができた１０４回目の夏の大会でした。

これからも、正確な判定を心掛け、みなさんと一緒に高校野球を支えていきたいと思います。この夏の大会に携わった全ての人に感謝します。本当にありがとうございました。



７月16日
海星　対　西海学園
法村　俊弥　球審
諫早球場にて

長崎文化放送(ＮＣＣ)　報道スポーツ部　　吉永　龍司

長崎文化放送（NCC）で毎年５月～７月にテレビ放送している「夢は甲子園」。
夏の高校野球長崎大会に出場する全チームを紹介する番組です。この放送をいつもご覧頂いている皆様、高野連の皆様、そして取材にご協力してくださるチーム関係者の皆様、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。
１校に与えられた時間はわずか60秒。その限られた中で今年のチームの特徴や、注目選手情報を１つでも多く盛り込もうと、四苦八苦しながら制作しています。
取材をしていてありがたいのは、僕らの取材を楽しみにして下さっている方が多いことです。マネージャーさんが「歓迎」と書いたホワイトボードを持って出迎えてくれたり、インタビューに答える気満々で、事前にコメントを考えてくれている選手がいたり、そんなシーンに出会う度に、「しっかり放送しなくては！」と気が引き締まります。
近年は新型コロナの影響もあり、対面での取材制限が増え、他県の系列局の中には、直接学校取材に行けず、チーム関係者に動画の撮影をお願いし、その映像を編集してテレビ放送する県も出てきています。対面取材でしか知りえない情報がたくさんあるのは想像に難くないと思います。
今後も工夫をしながら、時代に合ったやり方でチームの魅力を掘り下げていきたいと思います。高野連の皆様のご厚意で、ビッグＮスタジアムでの公式戦前に、これから対戦する２チームの紹介ＶＴＲを放送頂いています。スタジアムで観戦される方は、そちらにも是非ご注目ください。
ＮＣＣ「夢は甲子園」を来年もよろしくお願いします。

ＮＨＫ長崎放送局　アナウンサー　　嶋田　ココ

まずは、いつも高校野球を支えて下さっている皆様に感謝を申し上げます。
今年も選手たちの輝く姿を放送を通して伝えられたことを嬉しく思います。エラーのあとのプレッシャーのかかる場面、点差の開いた状態で迎える９回裏。どんな試合でも最後まであきらめず、勝利という目標に向かって真っすぐに向き合う姿が、見ている人たちの活力になっていると感じます。そして取材を通して心を打たれるのは、選手たちを支える人たちの姿です。
応援席には大会で初めてヒットを打った息子の姿に涙する保護者の方、手作りの応援グッズを持って駆けつけた地域の方々…一人一人にお話を伺うと、その温かさに胸が熱くなります。勝利インタビューの時、選手の口から一番初めに出てきた言葉が「勝利への喜び」ではなく、「周囲への感謝」であることも絆を物語っていると感じます。
選手たちや周囲で支える人たちがその日、その試合にかけて紡いできた日々の努力が垣間見える瞬間をお伝えできるよう、今後も取材に邁進してまいります。

テレビ佐世保　　田川　健一郎　　「高校野球で大切なもの」

「高校野球で大切なものは？」と聞かれると何を思い浮かべるだろうか。「優秀なピッチャー」「強力なバッター」「頼れるキャプテン」きっと人によって答えは違う。ケーブルテレビ局に約２０年間勤めている私は、いろんな角度から高校野球を見てきました。ゼロ行進が続く投手戦や互いに点を取り合う乱打戦、大差がついて一方的な試合となりながらも最後まで諦めない姿を見せたコールドゲーム、どの試合も名勝負です。

入社して間もない夏、その日予定されていた試合がすべて終わり、整備された静かなグランドのベンチ前に敗れたチームが整列していました。観客席に人の姿はなく静まり返った球場、その異様な光景に視線を奪われていると突如大きな音が球場に響き渡りました。「校歌」です。勝って歌うはずだった校歌を喉がかれるほどの大きな声で歌う球児の姿は、まだ高校野球をよく知らない私にとって衝撃的でした。

校歌を歌い終わり、最後に球児が声にした言葉「ありがとうございました！」。私はこれこそが高校野球で大切なものだと感じました。共に戦ってくれた仲間、厳しく指導してくれた監督・コーチ、そしてどんな時も支えてくれた家族、「感謝」の気持ち無くして高校野球は成り立ちません。

毎年春に開かれる審判講習会では、球児のためにルールを頭に叩き込み何度も判定のトレーニングを行う審判の姿が見られます。選手と同様だれもが真剣です。

高野連も大会まで準備を進め、やっと迎えた試合当日に雨が降ると空とグラウンドと予定表を見ながら頭を抱えています。「どうするのが球児にとって一番いいのか…」本気で悩んでいる様子はとてもボランティアでやっていることだとは思えません。

取材をしていると球場ではいろんな人の「ありがとうございました」という声が聞こえます。選手、運営、保護者、審判、だれもが感謝の気持ちに溢れています。私もこんなにも素晴らしい競技を取材させていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

ひまわりテレビ　　荒木　大輔　　「地元のヒーローから、甲子園のヒーローへ！」

私たちケーブルテレビは、例年夏の大会の様子を１回戦から３回戦まで中継させていただいています。

当然、出場校全ての試合の様子を地域の皆さんに、お届けできることに喜びを感じていると同時に、３年生最後の夏の涙と汗の結晶に素晴らしさ、残酷さを目の当たりにして、我々も高校野球の奥深さに取りつかれている“一視聴者”です。

ケーブルテレビという業種がら、各自治体に事業所を構え、基本的にはそのエリアの話題を取り上げています。

小学校、中学校の野球大会やソフトボール大会などで活躍していた、近所のあの子が、甲子園の切符をかけた舞台で活躍する姿を見ると、文字通り、“我が子のよう”な気持ちになり、中継中の試合でも、手に汗握ります。

全ての選手にドラマがあり、特別な想いがある。いつも取材時に実感させられます。

今後も地域メディアとして何ができるのか追求しながら、公平な視点で取材・中継を通し、高校野球を応援していきたいと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　付　　録　『監督たちの思い』　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

長崎西高校　監督　　大久保　耕造　　『キャッチボール』

子供たちが一番はじめに野球に触れ合うのは、おそらくほとんどが保護者とのキャッチボールであったと思います。スター選手にあこがれ、せがんで買ってもらったグローブを片手に、まだおぼつかない手つきで保護者の胸めがけて力一杯投げ込んだ。そして不思議なことに、投げてくるボールはいつも捕りやすいところに返ってくる。そういう親子のコミュニケーションに子供たちの野球の原点はあります。

つまり生徒たちの野球の歴史は、家族の歴史でもあり思い出でもあります。そして多くの生徒たちは、競技スポーツとしての野球を高校生で終えます。それが夏の大会です。活躍した選手にも、負けた選手にも、応援で終わった選手にもそれぞれこれまで歩んできた家族や仲間との物語が隠されています。高校野球のプレーに感動し、多くの人を魅了するのはそういうところにもあるのではないでしょうか。

また、野球はスポーツの中では珍しく、指導者も選手と同じユニフォームを着て戦います。より選手の思いを近くに感じながら試合をすることができます。夏の大会を終えた生徒たちを見ると、一つ大人への成長を遂げるように感じます。それは純粋に自分の可能性を信じチャレンジしたことへの誇りではないかと思います。

今年も涙の後に少したくましくなった生徒とともに球場を去りました。多くの感動をくれた生徒に感謝の気持ちでいっぱいです。

生徒を支えてこられた保護者にお礼を申し上げます。生徒たちにはこれまで野球を通じて経験したことを糧として、自分自身が主役の人生を全うしてほしいと思います。

最後に野球というスポーツが今後もますます発展し、多くの人に愛されることを切に願います。

戦況を見つめる
諫早球場にて

壱岐高校　部長　　松本　未来　　「高校野球の力」

「新部長です！よろしく！」と壱岐高校野球部の前で坂本監督からご紹介いただき、４ヶ月後に迎えた夏の大会でした。

私は高校時代、島原高校で野球部のマネージャーとして野球に携わって来ておりましたが、野球の技術指導はできず、ノックなんて全くで、こんな私が部長として野球部に何を与えられるのか、使命感も薄く、外から見ている自分が居たと思います。

しかし、私の心は急速に変化していきました。私の心を動かした壱岐高校野球部の面白さを書かせていただきます。

まず、「謙虚さ」です。指導を素直に受け入れ、練習に活かし、どんどん吸収していく力は、大きな武器だと感じました。挨拶もベンチでの声掛けも練習後の整備にも一生懸命取り組む様子は私だけではなく、壱岐の地元の方々へも元気を与えるものでありました。

そして、「向上心」です。自分の現状に満足せず、求められていることを理解して、一生懸命練習に打ち込む選手の姿がありました。また、間違っていることを選手同士で指摘し合ったり、練習や試合の中で疑問に思ったことを話し合ったりしている姿も見ました。選手の技術力向上のためにノックを練習し、スコア集計や動画撮影を行うマネージャーの姿もありました。チーム全体で力を引き上げ、技術力だけでなく、忍耐力も精神力も向上していることに感動しました。

私もこのチームの部長として何かできることは無いか、必死に考えている自分が居ました。自分が高校時代に北島監督からご指導いただいた「できんことはできん。できることは一生懸命やる！」の言葉も背中を押し、「力になりたい」の一心で夏の大会のベンチ内に立っていたと思います。

試合ごとにさらに成長していく生徒とこんな誇らしいチームを作り上げる監督とまだまだ一緒にグラウンドで戦っていたい。こんなに熱くのめり込むなんて思ってもなく、高校野球の人を動かす力を感じた次第です。

部長という立場からまた野球に携わらせていただいたことに大変感謝しております。これからも自分に何ができるか模索しながら頑張っていきたいと思います。

ベンチ前　諫早球場にて（諫早CATVより）

佐世保商業高校　部長　　郷野　功典

顧問として、部員が毎日楽しく野球に取り組んでくれるよう見守っていました。できないと思っていることにもチャレンジし、少しずつできるようになっているのを実感している姿を見ることができて嬉しかったです。

４月から加わった私のアドバイスを嫌な顔せず聞き入れて、実践してくれたことも本当に嬉しかったです。聞き入れてくれる部員たちともっと早く出会っていればなと今感じています。

少ない人数でも最後まで戦った先輩たちの姿は、必ず後輩の目にも焼き付いているはずです。これから社会に出た後も、嫌なことがあっても、続ければ何か良いことが待っていると、簡単に諦めない気持ちを持ってこれからの人生を歩んでほしいと思います。

佐世保西高校　監督　　萩原　広太　　『今年引退した３年生たちに贈る』

美術部、バドミントン部、科学部、サッカー部。今年の３年生が野球部の前に所属していた部活動だ。この学年が入学してきたときの入部部員は０名。そのため、当時の３年生が引退してからの新チームは部員不足となり、廃部の危機に陥っていた。

そんなとき、年度途中にも関わらず、他の部活動から野球部に入部してくれたのが、今年の３年生であった。

初めはキャッチボールもままならないのが現状であった。しかし、日々上達するのが目に見え、同じグラウンドで活動をしていた陸上部、サッカー部からは、フライを取るだけで、拍手を浴びるなど、選手自身もスタッフも共に喜び合う日々が続いた。そんな状況であることは学校職員も知っており、校内でも選手・スタッフに声をかけてくれる職員が増えた。

そして迎えた今年の甲子園予選。３年振りに開催された開会式にも参加し、選手たちにとって、非常に良い経験になったと思う。

試合は０－１７の５回コールド負け。結果だけを見れば大敗であった。しかし、野球のルールも分からず、キャッチボールも覚束ない選手たちが、最後の試合ではノーエラーの試合をした。持てる力を全て出し切った。最高のプレーをした。

約１年間だけであったが、急成長した君たちを間近で見ることができたことは、顧問としても後輩たちにとっても、勇気づけられた。「不可能なことはない。」「必ずできるようになる。」こういった言葉を体現してくれたような気がする。

最後の最後まで、試合に臨んでくれた３年生諸君、君たちのお陰で、今もなお佐西野球部は存続している。心から感謝したい。そして、全国には、最後の夏、グラウンドに立つことなく引退する選手たちが多くいる。そんな中、君たちは、夏の甲子園予選に選手としてグラウンドに立てたことは事実であり、今後の君たちの人生において胸を張れることであることに、変わりはない。

将来、高校球児であったことが、君たちの人生の貴重な１ページになることを願い、私からの贈る言葉としたい。本当にありがとう。

鹿町工業高校　部長　　青島　立弥　　『８年ぶりの夏の終わりに』

わが母校では、夏の大会が終わると３年間の高校野球人生を振り返る「夏の終わりに」を書くことが伝統であった。８年ぶりに高校３年生のときに書いた文章を読み返すと、「高校野球の指導者になって、高校野球に恩返しがしたい」と記してあった。

８年が経った現在、高校野球に携わり、またこのように「夏の終わりに」を指導者として書くことができることは、この上ない幸せなことだ。

球児たちのひたむきな姿、泥だらけになって白球を追いかける姿は見る者すべてを感動の渦に包み、どの対戦も両チームの思いがぶつかる最高の試合だった。

夏の大会に敗退した３年生の目には大粒の涙が流れ、この涙は３年間の喜び・達成感や悩み、感謝、いろいろな感情が詰まったものだ。この涙は３年間野球を続けたものにしか、流せない最高の涙だと思う。

最後のミーティングでは、大人になった今でも涙を堪えることができない。特に夏の大会を見ていると、高校野球は本当に素晴らしいと感じる。鹿町工業高校でも、去年の今頃、力もなくベンチに入ることがやっとだった生徒が、本大会ではレギュラーとして活躍してくれた。技術的な成長はもちろん、何より一人の人間として大きく成長してくれたことをうれしく思う。

私自身、初めて監督という重責を担い、生徒が成長してくれる喜び、思いが伝わらないもどかしさを感じ、高校野球の奥深さを痛感した１年であった。

今後とも生徒ともに汗を流し、高校野球の神髄を求めたい。

開会式　進行係　青島理事
長崎県営野球場にて

チームメイトの応援　　諫早球場にて

波佐見高校　部長　　米田　一夫

私は、高校野球に携わらせていただき、３２年目となるが、思い返せば多くの経験をさせていただいている。

初任校は、壱岐商業高校で、平成３年４月に赴任した。右も左もわからなかった私を先生方が温かく迎え入れてくれた。

現長崎商業の監督の西口先生の後ということもあり、プレッシャーも感じつつ、「先生の好きなようにやらんね」という当時の教務主任の先生からの言葉かけをありがたく受け取りながら、部活動指導に励んでいたことを思い出す。

平成９年４月に大崎高校に赴任をした。高校時代を思い起こすような生徒のあいさつに感動した。また、地域の温かさを感じる町であった。

赴任した当時は、平山隆監督（前大崎高校校長・現創成館高校勤務）の元、生徒との向き合い方・指導にあたるための研究、生徒の学校生活などなど多くのことを学ばせていただき感謝をしている。

当時、得永祥男先生（元波佐見高校監督）が発起人となり離島チームの強化ということで５月のゴールデンウィーク期間中に「佐世保地区大会」が実施されていた。その「第９回佐世保地区大会」で大崎高校は見事優勝を果たした。その年は、佐世保野球場の改修工事があり、平戸の赤坂球場で準決勝・決勝戦が行われた。準決勝の佐世保実業戦に勝ち、決勝戦は壱岐高校との雨の中での対決であった。翌朝、当時の大崎高校の藤原善行校長から臨時の全校集会を行っていただき、野球部員のがんばりを全校生徒に報告できたことに感動した。

平成１７年４月に佐世保商業高校に赴任した。当時は、小宮監督（現小浜高校副部長）の元、熱血指導を目の当たりにし、高校野球の原点に返らさせていただいたような気がする。コツコツと「積み重ねる」ことの大切さを全部活動生徒を通して感じさせられる高校であった。佐世保商業時代は、平成２４年に佐世保地区の新人戦で優勝することができた。決勝戦は、波佐見高校と対戦し、２対０でリードしていたが９回に追いつかれ延長戦、１１回に１点取られ追いつかれたが、その裏追いつき、１４回に３点取られ、４点を取り返しサヨナラゲームで勝利した。１４回に３点とられた投手が泣いてベンチに返って来るのをみて、その裏、一塁手の選手が、「まだ負けたわけじゃないぞ！俺たちで取り返すぞ！」という言葉は今でも鮮明に蘇ってくる。その試合は、私の高校野球人生の中でも強く心に残っているゲームの一つである。

次の年、夏の大会の１回戦で諫早高校と対戦した。当時諫早高校には前年の秋の大会で九州大会に出場した好投手の馬場投手がいた。この対戦で、１対０で勝利することができた。その１点はスクイズ失敗で３塁ランナーが挟殺プレーをかいくぐり見事にホームをついた１点であった。そして、佐世保商業投手の森田大智君は、ノーヒットノーランを達成することができた。確かそのゲームも雨が降っており、試合途中、長い中断の中でのゲームだった。

平成２９年４月に波佐見高校に赴任した。赴任した夏、第９９回全国高等学校野球選手

権大会で甲子園に連れて行ってもらった。私の高校時代、井上慶稀監督のもと、甲子園を目指していた高校２年生以来の甲子園球場アルプススタンドであった。波佐見高校と波佐見町が一体となって波佐見高校野球部を支えていただいていることを痛感した。平成８年に波佐見高校が甲子園初出場ベスト８だった時に「炎の軍団」と名付けられたが、まさに炎のごとく、熱く熱く指導も行われており、地域の方々の期待も熱かった。

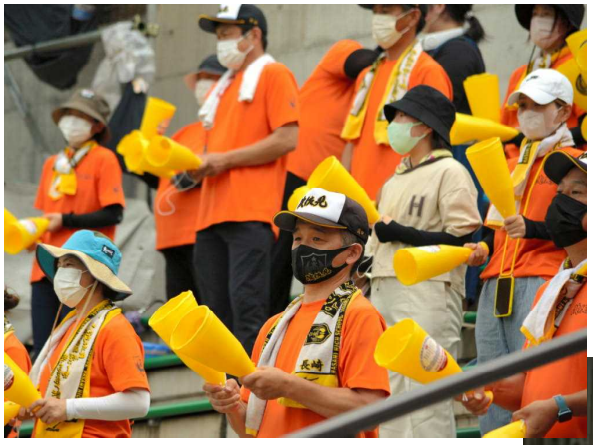
第９９回大会の県大会決勝戦では、清峰高校と対戦し、２対０でリードしていたが、９回に追い付かれ延長戦へ。延長１０回に２ランホームランを打ち、４対２で勝利した。この試合も劇的な試合で、強く心に残る試合であった。

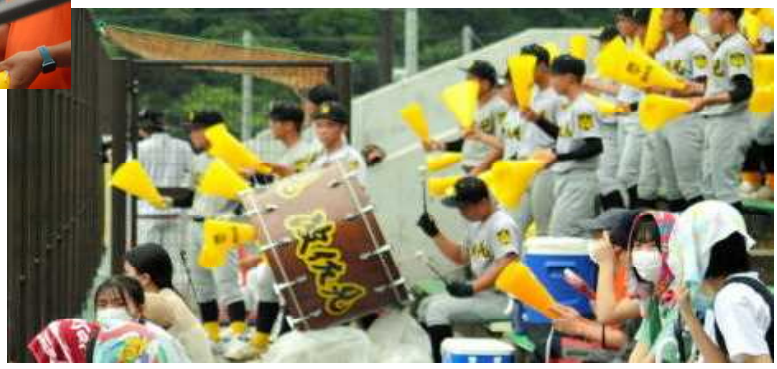
振り返ってみると、多くの生徒に元気・勇気をもらいながら、練習試合等でお世話になった先生方からもご指導・ご助言などをいただき、多くの経験のもと、大好きな野球ができていること、高校野球に携われていることに感謝をしている。野球部に生徒がいたからこそ、このような多くの良い思い出ができていることが私の宝である。

現在は、長崎県高等学校野球連盟副理事長という立場でも高校野球に携わらせていただいている。理事に入る以前、現場で指導をしているときに感じていなかったことを多く実感している。

野球ができているのは、もちろんそこに生徒がいるから、そしてご理解・ご協力をいただいている保護者、また、審判をはじめ大会運営等裏方で支えていただいている方々、それぞれの高校がある地域の方、その高校の先生方、高校野球ファンなど多くの方々の支えのお陰であることを忘れてはならないと思う。試合での勝利も大事であると思うが、生徒一人一人の人間性を高めること、人間的に成長させることも重視して、社会で通用する人材育成をしていくことも高校野球に携わっている者の大きな使命であると思う。

私自身、今まで育てていただいた、多くの方々に感謝をすることを忘れずに、今後とも学び続け高校野球に携わっていきたいと強く思う。





スタンドからの応援
諫早球場にて

平戸高校　部長　　林田　景太

試合終了後、選手唯一の３年生がみせた表情がとても印象に残っています。全身真っ黒に汚れたユニホームが溢れんばかりの笑顔をより一層輝かせていました。まさに高校野球を存分に楽しんだという表情でした。そんな彼の表情を見て、「高校野球は勝つことだけが全てではない！」と改めて感じさせられました。

本校の野球部は３年生の選手が１名、マネージャーが１名、２年生の選手１名の計３名で日々の活動に取り組んできました。少人数の練習でも、目を輝かせて「野球が楽しい！」と毎日のように話してくれました。

では、なぜ野球が楽しいと思ってもらえたのでしょう。それは選手個々が主体となって野球に取り組む環境を作ることができたからだと思っています。

合同練習や練習試合の課題を踏まえて練習メニューを選手に考えさせたり、練習中は常に疑問を投げかけ、考えて野球をする重要性を伝えてきました。あのプレーは自分だったらどうするのか、なぜうまくいったのか、うまくいかなかったのかという問いに対して、選手と対話しながら丁寧に紐解いていくことが野球経験の乏しい本校の選手には必要だと感じたからです。

選手が考えて答えを導き出すまで非常に時間がかかります。そのため答えを教えたくなることが何度もありましたが、ずっと待ち続けてきました。その結果、少しずつ考えて野球ができるようになり、生徒が自分の考えを自分の言葉で伝えられるようになってきたと感じます。『一日一学』高校野球を通しての学びが、一生の学びとして胸に刻まれることを願っています。

そして、私自身まだまだ未熟ではありますが、高校野球指導者として、初心者・経験者は関係なく、「野球が楽しい、もっと好きになった」と思える選手を一人でも多く育てていきたいと思います。

最後に、今大会には佐世保商業高校、上対馬高校との合同チームで出場させていただきました。また近くの学校が合同練習を提案してくださるなど、周りからの助けがあって高校野球を続けられました。この場を借りて感謝申し上げます。

試合前準備

上対馬高校・平戸高校・
佐世保商業高校の連合チーム

佐世保野球場にて

諫早高校　監督　　田中　秀和

今年度は、本校で監督となって二度目の夏となった。

今年の３年生は選手４人、マネージャー２人であり、入学時より人数の少ない学年であった。つまり、部の運営に対する一人ひとりにかかる負担は大きく、大変であったことだろうと思う。

チームをどのようにしていけば、良い方向に進むのか悩む様子を見ながら、少しずつ成長していく姿を見守ることしかできなかった。現在の指導陣のいろいろな考えを聞いていく中で、逆に迷いを生じさせてしまっているのではないかと私も悩み続けた１年であった。

チームの始まりは、各人が異なる方向を向いており、どこか他人事のような色合いが強かった印象だった。そこから、打線であり、中継であり、気持ちの面であり、集団競技である野球における「線」を意識させ、自分事として捉え、みんなでやるという意識を持てるように指導することを心掛けた。

技術的な面では、チーム開始時から失点数と３Ｂ（四死球・バント失敗・ボーンヘッド）＋Ｅ（エラー）の関係性を解き、これを減らすことに努力していった。しかし、減ることは最後までなかった。そこで「起きた時に、次にどう対処するか」という考え方をするように指導していった。

夏の大会も結局３Ｂ＋Ｅによって敗戦し、そこには普段の生活からの取り組みが露呈することを改めて痛感した夏であった。今後も人間性の育成を礎として指導していきたい。

守備のタイム　　佐世保野球場にて

大村工業高校　監督　　髙比良　俊作

私が初めて高校野球の指導に携わったのは、今から２７年前。長崎県の教員採用試験になかなか合格できず、建設会社でアルバイトをする傍ら、将来は指導者になりたいという想いを受け入れてくれた創成館高校（当時は下野監督）で野球の勉強をさせていただいていました。

そんな中突然、県教委から電話があり「対馬の豊玉高校で期限付きで働かないか？」という話をいただきました。行くことに迷いはありませんでしたが、一度も行ったことのない国境の島で、どのような生活が待っているかは想像もつきませんでした。

しかし、そんな不安も着任したその日に一瞬で吹き飛びました。軟式野球部しかない豊玉高校でしたが、選手たちのレベルは高く、毎年のように北部九州大会に出場しており、全国大会目指している生徒の目は輝いていました。甲子園という夢の舞台には届かない軟式野球の世界で、純粋に野球に打ち込む生徒に学ぶことは多く、私自身も本気で「この子を上手くしてあげたい」という気持ちが芽生え、指導者としての心のベースを作ることができたと感じています。

６年間過ごした対馬を離れ、次に赴任したのは長崎商業。伝統校で野球部のスタッフには入れず、女子応援部の顧問となりました。１３名の部員は、活動はするものの目標はなく、ただ所属しているだけという感じでした。早速、グラウンドへ行き西口先生（現監督）に相談し、「一回戦から応援させてもらえないか？」とお願いしたところ快く許可していただきました。

初めて引率するビックＮ、対戦カードは海星対長崎商業。そこで私は当時の理事（故　福本先生）にお願いして、茶髪・ピアス・ルーズソックスで球場入りしていた当時の部員の前で、私自身を説教してもらいました。

福本先生が言った内容は①球場でのマナー②伝統校の生徒であることの誇り③応援の素晴らしさこの３点でした。球場の柱の陰で「あれくらいで良かったか？」と聞かれニコッとわらって去っていく福本先生には今も感謝しています。

応援部の活動の最後は、野球部の夏の終わりと同じ日です。そんな想いで活動を重ねる生徒たちの心の中に熱いものが生まれ、仲間を応援することの素晴らしさに気づいたのか、その後部員は増え続け、２年間で５３名になりました。

次に着任したのが上五島高校。私はここで初めて硬式野球部の監督をすることになりました。身体能力の高い島の子は対馬でも見てきましたが、上五島高校の生徒たちはもうひと回り身体が大きかったという印象でした。

高校野球からは遠ざかっていましたが「このチームは強いんじゃないかな？！」という感想を持ったのを覚えています。ただ自分の感覚を試す練習試合の場がないという離島のハンデ。言葉の力で経験値を上げる作業は、実践の１０倍以上かかると感じました。

結局このチームは、夏ベスト８まで勝ち上がりましたが、離島のハンデと戦った２年間を過ごさせていただきました。その後、北松農業では女子ソフトボール部、鹿町工業では水泳部と高校野球と離れた時間を過ごしましたが、そんな時でも常に野球を通じた出会い

が私を支えてくれました。

私は４０歳になる年、これが最後と決めた採用試験に合格することができ、大村工業高校に正式に赴任することになりました。県内で最も多い部員を抱え、バレーボールやソフトボールが全国トップレベルのこの学校では、多くの刺激を受けながら指導者としても大きく成長させていただいたと思っています。

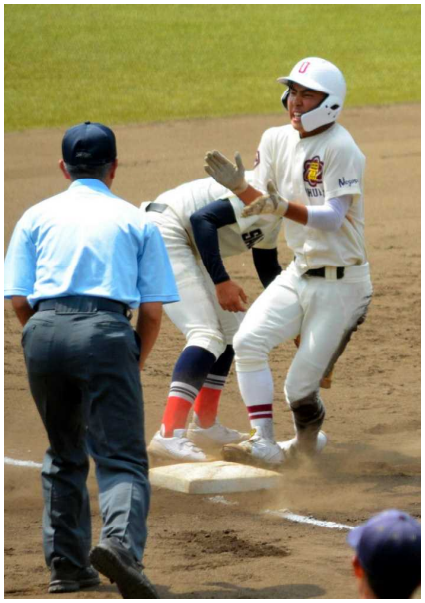
夏勝つことを目標に、１年間かけてチームを完成形に近づけていく作業は監督ひとりではできる事ではなく、保護者やＯＢ、またスタッフの力を借りて成し遂げられるものだと思っています。ここ数年はコロナウイルス感染症とどのように向かい合い、その中で生徒たちにどれだけ満足のいく３年間を与えられるかも、たくさんの人々の支えの中でできる事だとつくづく感じています。

今年の夏は惜しくも１回戦で敗れてしまい、最後まで今年の３年生に楽しい高校野球を体感させることができなかったと指導者としての力不足を感じています。

ただ、私がこれまで出会ったたくさんの生徒たち、また支えてくれた先生方、私の周りに起こった様々な出来事を通して感じることは、「やっぱり高校野球は最高だ！」という事です。

高校野球に出会えたことに感謝。そしてみんなにありがとう。

祈願はスタンドにも



チャンス　ランナー３塁

バッテリーの青春の一部

諫早球場にて

島原農業高校　監督　　皆良田　一輝　　『できっこないをやらなくちゃ』

これは島原農業に赴任する前の学校で、ある部がスローガンにしていた言葉です。

歌のタイトルらしいのですが、いつしか私の好きな言葉の１つとなり、この原稿を書く際に、浮かんだ言葉でもありました。

生徒達には、出来ないことに目を向ける事＝短所の克服が、夏の勝利に不可欠であると年間を通じて伝えてきました。敗戦する毎に面談で、各個人の短所を分析・共有し、グラウンドでは課題練習と称して短所克服に挑戦してもらいました。

出来ない事ですから、知識の定着・技術の体得・実戦での実践、そしてその技術を生かしてチームの勝利に貢献という一連の過程を達成するまでには時間がかかります。

そうしたうまくいかない状況が続けば、生徒達から『もう、どうせできっこない』とか『このチームで夏に勝てっこない』等のマイナス面が噴出し、チームが空中分解する危うさもあったかと思います。そうならぬよう、チームを鼓舞し続けたのが、主将と副主将の２人でした。

２人はチームの為に努力を惜しまない献身的な姿勢、劣勢な場面でも最後まで諦めないひたむきさ、何よりも自分の弱さと向き合える強さをもった生徒達でした。特に主将は、チームメイトに朝練をするように呼びかけ、練習に励んでいました。

時にはうまくいかない状況に、心折れそうになった事もあったようですが、短所に向き合うというチーム方針を最後まで体現してくれました。

開幕戦、サヨナラ勝利を挙げた最後の場面でホームベースを踏んだのは、その主将でした。今年の島原農業を象徴する選手であった彼が勝利のホームベースを踏んだことは、勝った喜びはもちろん、彼の努力が報われた瞬間でもあり、私自身も万感の思いで見ていました。

最後まで短所に向き合う事を止めなかった主将・副主将を含めた３年生達には感謝しかありません。新チームはこの夏をスタメンで経験した選手が多いので、後輩達が先輩達の想いを受け継ぎ、さらに島原農業高校野球部が発展するように精進していきたいと思います。

勝利の校歌斉唱　　県営野球場にて

あとがき

今年もまた、コロナ禍での選手権大会となりました。その中でも高校生の熱い戦いが繰り広げられました。そして各チームの大会にかける思いが、強く出た大会だったようにも思えます。選手権大会は野球部員全員で臨む最後の大会だけあり、選手たちを取り囲む学校関係者、保護者、ＯＢなどの力の結集といったところではなかったでしょうか。

さて、今回の「2022 夏の終わりに」は、それぞれの大会や高校野球の裏側で大会等を支えてくださる方々にスポットをあて、『高校野球を支える人たちの思い』と題し、日頃裏方に徹してはいるが、大会運営には必ず必要な人たちの思いを取り上げてみました。それぞれの立場において、高校野球を盛り上げようと奮闘されている姿が見て取れ、有り難い気持ちでいっぱいです。そして文章に目を通しますとあちらこちらで、『高校野球の心』が生まれ、引き継がれていることを実感し、嬉しく思います。

試合は勝負事ですから勝敗はつきます。勝ったチームの謙虚さ、負けたチームのいさぎよさも「高校野球の心」の一つであり、高校野球の魅力ではないでしょうか。「やれることをやる」、「やれるようになる」、今後とも高校球児には望むところです。

また、付録として昨年のテーマであった『監督たちの思い』で監督・部長の方々にも協力いただきました。今回もたくさんの方々から執筆をいただき、この冊子ができあがりました。心からお礼申し上げます。

文中の写真は、今回も朝日新聞社、長崎新聞社に提供していただきました。また、一部の写真は、各学校の野球部に提供していただきました。ご協力に感謝いたします。ありがとうございました。

次号は、「2023　夏の終わりに『高校野球を応援する人たちの思い』」を予定しております。また次回もご協力をよろしくお願いします。

令和４年１０月

長崎県高等学校野球連盟　顧問　　北島　弘道

2022夏の終わりに　『高校野球を支える人たちの思い』

発　　行　　2022年10月20日
企画・編集　　長崎県高等学校野球連盟　顧問会
千綿　勝彦　　藤武　　透　　角西　政信
嶋田　佳行　　北島　弘道
協　　力　　長崎県高等学校野球連盟
朝日新聞社・長崎新聞社